



平成13年度
慶應義塾大学体育研究所
活 動 報 告 書



目 次

巻 頭 言	1
-------	---

第1部 研究分野

1. 個人研究業績及び研究活動報告	3
2. 所内定例研究会発表要旨	11
3. 浅野基金研究補助報告	24

第2部 教育分野

1. 体育理論（スポーツサイエンス）と保健衛生（ヘルスサイエンス）	25
2. 体育実技（スポーツクラス）	26
3. 通信教育部対象の保健体育科目	29
4. 平成13年度体育実技（スポーツクラス）履修者アンケート集計結果	30

第3部 スポーツ振興分野

1. スポーツ大会	37
2. 公開講座	40
3. 横浜市民講座	41
4. 教職員対象フィットネスプログラム	42
5. 他機関との連携	43
6. 所内施設の開放	44

第4部 総務分野

体育・知育・徳育	47
体育研究所及び所内組織図	51

巻 頭 言

体 育 研 究 所

所 長 高 嶺 隆 二

体育研究所が創設されて本年（平成13年）は、40年の節目の年に当たります。

平成13年度版体育研究所活動報告書の発刊に当たり、塾の保健体育科目の変遷について、歴史をなぞってみました。

大学で保健体育科目が正課の授業として設置を義務付けられたのは、昭和24年（1949年）のことであった。以来52年が経過したことになる。慶應義塾では、学内に後に体育研究所の創設に尽力された故浅野均一教授（医学博士）を中心にした数名の委員による体育委員会が設置され対応策が検討された。

文部省の大学基準の授業科目および単位数は、講義と実技の2本立で各2単位計4単位というものであった。講義は衛生および衛生政策を含む保健教育と体育理論（体育の目的、スポーツの規則、技術、社会体育）とからなっていた。

しかしながら、昭和24年4月には、日吉地区は米軍から返還されておらず、実技は夏季休暇中に三田の山の空き地や綱町グラウンドを使用するとか学習院、芝公園、浜離宮のグラウンドを借用しながらの展開であった。同年10月に日吉地区が完全返還され翌年の25年から大学が使用できることになった。しかし、体育実技が基本体育と選択種目体育の体制で定着できるようになったのは翌年の26年4月からであった。

それから10年後の昭和36年、先の故浅野均一教授らの強い要請によって、それまで学部所属であった体育教員を専任の所員とする体育研究所が日吉に創設されることになった。

爾来40年、所員は一丸となって塾生に対する保健体育の教育と体育学の研究に専念して今日に至っている。この間、平成5年からは文部省の大学設基準の大綱化によって、これまで必修科目であった保健体育科目は塾の各学部とも選択科目として位置付けられたのであるが、当研究所では一人でも多くの学生がスポーツに触れる環境を整えるべく研究を重ね、毎年度8000名内外の履修者を数える体制を確立した。

さらに、学生のみにとどまらず塾に働く教職員はもとより地域住民をも対象にした各種スポーツ教室を開講し、塾のスポーツ振興の拠点となるべく研鑽を積んでいるところである。各位のご支援を期待したい。

第1部 研究分野

概 要

21世紀が始まった。昨年発刊された「体育研究所プロジェクト研究報告 2000」を受け継ぎ、現代におけるスポーツ・健康教育の重要性を裏付け、情報の発信源となるべく研究活動を推進していきたい。

平成13年度から体育研究所の研究基金である浅野基金を所員の研究推進を目的とした助成制度の下に活用することとなった。希望者の申請により補助を決定し当該年度1年間の研究遂行に補助される。初年度となる平成13年は、吉田泰将君他の「剣道における正面素振り動作のバイオメカニクス」への補助が決定し、その成果の概要は本報告書に掲載されている。次年度以降も同様に共同研究、各個研究推進のため有効に活用していく予定である。

本章には、その他、各所員の1年間の研究活動の概要および体育研究所内定例研究会の発表要旨を掲載した。

1. 個人研究業績及び研究教育活動

今栄貞吉（教授）

学会発表等

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発表年	月
阿久根英昭、宮崎光次、清水安夫、安藤勝英、今栄貞吉、山内賢	左右脚長差の要因、及び背骨の歪みとの関係について	日本体力医学会第56回大会		2001	9

近藤明彦（教授）

著書

著 者 名	著 書 名	発 行 所	発行年	月
市村操一、阪田尚彦、加賀昌明、松田泰定編、近藤明彦、吉本俊明	体育授業の心理学	大修館書店	2002	3

学会発表等

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発表年	月
Akihiko Kondo, Toshiaki Yoshimoto, Kazuo Fukami	Quantitative Analysis of Stress Indicators in Middle Aged Elderly Females	International Society of Sports Psychology, 10th World Congress of Sport Psychology		2001	5
近藤明彦、市村操一	ウォーキング・エクササイズの正課体育授業への導入の試み	日本生涯スポーツ学会第3回大会		2001	10
市村操一、近藤明彦	明治期の文学者のウォーキングにおよぼした英国ロマン主義の影響	日本生涯スポーツ学会第3回大会		2001	10

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

文部科学省学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクト「文化としてのウォーキング」研究代表者	通 年
国際スポーツ心理学会（International Society of Sport Psychology）理事	通 年
日本スポーツ心理学会理事	通 年

安藤勝英（教授）

学会発表等

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発表年	月
阿久根英昭、宮崎光次、清水安夫、安藤勝英、今栄貞吉、山内賢	左右脚長差の要因、及び背骨の歪みとの関係について	日本体力医学会第56回大会		2001	9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

塾体育会柔道部師範	通 年
東京学生柔道連盟理事	通 年

植田史生（助教授）

論文・報告書

著 者 名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
植田史生、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二	剣道の素振りにおける指導法に関する一考察	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	23-30	2002	1
望月康司、吉田泰将、村山光義、佐々木玲子、植田史生	剣道の面打突における踏み切り動作	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	31-38	2002	1

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

慶應義塾体育会剣道部監督就任	通 年
第43回全国教職員剣道大会審判員	2001 8
南ドイツ剣道連盟 新年稽古会 剣道講師	2002 1
ハーヴァード大学剣道 特別稽古会 剣道コーチ	2002 2

松田雅之（助教授）

論文・報告書

著 者 名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
松田雅之、石井哲次、石濱信司、弘卓三	100 m 走におけるスピード曲線の即時的フィードバック効果について	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	15-21	2002	1

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

三田体育会理事・慶應義塾体育会競走部監督	通 年
東京陸上競技協会理事	通 年
関東学生陸上競技連盟強化委員	通 年

佐々木玲子（助教授）

論文・報告書

著 者 名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
佐々木玲子	スポーツの身体と舞踊の身体～ヒトの身体像の多様性	女子体育	43	10	51-55	2001	10
佐々木玲子	大学生の体力の年次推移	体育の科学	52	1	43-47	2002	1
佐々木玲子	子どものリズムカルな運動の調整能の発達について	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	1-14	2002	1
植田史生、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二	剣道の正面素振りにおける指導法に関する一考察	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	23-30	2002	1
望月康司、吉田泰将、村山光義、佐々木玲子、植田史生	剣道の面打突における踏み切り動作	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	31-38	2002	1
佐々木玲子	身体の単一・複数部位使用における動作の抑制機序からみた動作調整の発達	文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書				2002	3

学会発表等

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄録等	発表年	月
佐々木玲子	グリップ動作を用いた一側および両側使用時の反応時間	第56回日本体力医学会	体力科学 50	2001	9
村山光義、佐々木玲子、近藤明彦、沢井史穂、佐々木玲子、望月康司、山本利春	長時間の運動実施に伴う下腿筋の筋硬度変化——サバイバルエアロビクス大会参加時の事例報告——	第52回日本体育学会	大会号	2001	9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

日本学術会議・体育学・スポーツ科学研究連絡委員会委員	通 年
日本バイオメカニクス学会編集委員	通 年
比較舞踊学会理事	通 年

研究助成等

身体の単一・複数部位使用における動作の抑制機序からみた動作調整の発達	文部省科学研究費（基盤研究 C）	190万円
身体の単一・複数部位使用時における子どもの動作制御系特性	慶應義塾学事振興資金（各個研究）	20万円

石手 靖（専任講師）

論文・報告書

著 者 名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
石手靖、岩波力、内匠屋潔、太田繁、太田あや子	スクーバダイビングの授業運営——学生による授業評価からの検討——	大学体育 (The University Physical Education and Sports)	28 (第74号)	2	83-89	2001	11

学会発表等

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発行年	月
石手靖、岩波力、内匠屋潔、太田繁、太田あや子、斎藤好史	Management of SCUBA Diving Classes: An Examination of Student Views Regarding SCUBA Diving Classes	The First Pacific Rim Conference on Leisure Education	Book of Abstracts	15	2002 1
斎藤好史、石手靖、加納弘二、太田繁、太田あや子、三枝佳紀	A Brief History of Leisure Diving in Japan	The First Pacific Rim Conference on Leisure Education	Book of Abstracts	14	2002 1
太田繁、市原隆久、太田あや子、岩波力、加納弘二、斎藤好史、石手靖、内匠屋潔	University-Level SCUBA Diving Instruction in Japan	The First Pacific Rim Conference on Leisure Education	Book of Abstracts	16	2002 1

山内 賢（専任講師）

論文・報告書

著 者 名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
山内賢	スキースポーツにおけるバリアフリーの問題点（その1）～身体に障害がある者のスポーツへの関心度と視覚に障害のある者におけるスキー場の安全性について～	スノージャーナル	3	1	4-17	2001	9
山内賢	スキースポーツにおけるバリアフリーの問題点（その1）——視覚障害者に対するスキー指導の体験報告——	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	47-56	2002	1

学会発表等

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発行年	月
澤藤甲、大下聖治、永田俊勝、山内賢、佐藤宏幸	シャトルラン・テストにおける評価の適応性について—— $\dot{V}O_2\max$ の換算値と実測値の関係——	日本運動・スポーツ科学学会第8回大会			2001 6
澤藤甲、永田俊勝、大下聖治、山内賢	シャトルランテストにおける評価の適応性についての検討——心理的アプローチの試み——	日本体力医学会第56回大会	体力科学 50	6	928 2001 9

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発行年	月
阿久根英昭、宮崎光次、清水安夫、安藤勝英、今栄貞吉、山内賢	左右脚長差の要因、及び背骨の歪みとの関係について	日本体力医学会第56回大会		2001	9
山内賢、千葉義信、荻田亮、市河勉	スキースポーツにおけるバリアフリーの問題点——視覚障害者におけるスキー指導の体験報告——	日本体育学会第52回大会		2001	9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

慶應義塾大学体育会ハンドボール部ヘッドコーチ	通 年
日本運動・スポーツ科学学会理事	通 年

吉田 泰将（専任講師）

著書

著 者 名	学術論文・報告書等の名称	発 行 所	発表年	月
財団法人全日本剣道連盟（分担執筆）	剣道医学 Q&A	財団法人全日本剣道連盟	2001	7

論文・報告書

著 者 名	学術論文・報告書等の名称	発表学会等の名称	巻	号	頁	発表年	月
植田史生、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二	剣道の素振りにおける指導法に関する一考察	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	23-30	2002	1
望月康司、吉田泰将、村山光義、佐々木玲子、植田史生	剣道の面打突における踏み切り動作	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	31-38	2002	1

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

財団法人 全日本剣道連盟 社会体育委員会 委員	2001	～9
財団法人 全日本剣道連盟 情報システム委員会 委員	通年	
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（中級）講師・警視庁	2001	4
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（中級）講師・福岡	2001	6
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（初級）講師・青森	2001	6
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（初級）講師・千葉	2001	7
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（初級）講師・島根	2001	8
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（初級）講師・愛媛	2001	9
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（中級）講師・北海道	2001	10
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（初級）講師・滋賀	2001	11
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（中級）講師・愛知	2001	12
全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（中級）講師・大阪	2002	3

加藤大仁（専任講師）

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

JBL フューチャー・スターズ・キッズ・スクール主任講師	2002	4-12
------------------------------	------	------

村山光義（専任講師）

著書

著者名	著者名	発行所	発表年	月
南谷和利監修、山本利春、村山光義ほか (分担執筆)	健康づくりのサイエンス——目的別運動プログラムの理論と実際——	サンウェイ出版	2001	6

論文・報告書

著者名	学術論文・報告書等の名称	発表学会等の名称	巻	号	頁	発表年	月
望月康司、吉田泰将、村山光義、佐々木玲子、植田史生	剣道の面打突における踏み切り動作	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	31-37	2002	1
望月康司、吉田泰将、村山光義、佐々木玲子、植田史生	剣道の面打突における踏み切り動作	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	31-37	2002	1

学会発表等

発表者名	演題名	発表学会等の名称	抄録等	発表年	月
T. Nigorikawa, M. Yasukawa, K. Oishi, N. Tanaka, M. Murayama	Type A behaviour pattern and injuries in college athletes	The International 16th Puijo Symposium		2001	6
M. Murayama, T. Yoneda	Evaluation of the hardness of isolated frog muscle using a mechanical pressing method	34th International Congress of Physiological Sciences		2001	8
村山光義、米田継武	神経刺激による筋疲労前後でみた非摘出筋の筋硬度変化	第56回日本体力医学会	体力科学 50	2001	9
濁川孝志、上村真美、安川通雄、大石和男、田中伸明、村山光義	タイプ A 行動パターンとスポーツ障害	第56回日本体力医学会	体力科学 50	2001	9
村山光義、沢井史穂、佐々木玲子、望月康司、山本利春	長時間の運動実施に伴う下腿筋の筋硬度変化——サバイバルエアロビクス大会参加時の事例報告——	第52回日本体育学会	大会号	2001	9
村山光義	各種持久力競技における訓練法とその評価：長距離	第5回日本レーザースポーツ医学会学術大会	大会抄録集	2001	10
西川龍朗、内山孝憲、村山光義	押し込み反力計測によるヒト上腕の硬さ計測——非線形フォークトモデルと4要素線形モデルによる近似——	第22回日本バイオメカニズム学術講演会	講演集	2001	11

研究助成等

筋の硬さ測定における押し込み反力と筋張力との関係	文部省科学研究費（奨励研究）	50万円
--------------------------	----------------	------

野口和行（専任講師）

論文・報告書

著者名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
野口和行	イメージする、表現する、発表する ——「つくる」ことを中心としたアウトドアゲームのプログラム	野外教育情報	10		46-53	2002	3

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

財団法人日本教育科学研究所 研究員	通 年
大学スケート研究会 常任理事	通 年
(助) 日本教育科学研究所「アウトドアゲーム講習会」講師	2001 6
(助) 日本教育科学研究所「アウトドアゲーム講習会」講師	2001 10
国立オリンピック記念青少年総合センター主催事業「青少年野外教育全国フォーラム」講師	2002 2

望月康司（助手）

論文・報告書

著者名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
望月康司、吉田泰将、 村山光義、佐々木玲子、 植田史生	剣道の面打突における踏み切り動作	慶應義塾大学体育研究所紀要	41	1	31-37	2002	1

学会発表等

発表者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発表年	月
村山光義、沢井史穂、 佐々木玲子、望月康司、 山本利春	長時間の運動実施に伴う下腿筋の筋硬度変化——サバイバルエアロビクス大会参加時の事例報告——	第52回日本体育学会	大会号	301	2001 9
小森康加、望月康司、 榎本至、前田明	水球競技におけるミドルシュート能力の評価	第14回トレーニング科学研究会	抄録集		2002 2

小牧久見子（助手）

著書

著者名	演 題 名	発表学会等の名称	抄 録 等	発行年	月
小牧久見子	女子大学新体操選手の減量方法に関する実態調査	日本体育学会第52回大会	大会号	582	2001 9
小牧久見子、中村奈々子、 近藤明彦	日本語版月経に伴うストレス反応(MSQ) 尺度の作成	日本心理学会第65回大会	発表論文集	1062	2001 11

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

第9回シンクロナイズド・スケーティングオープン大会優勝	2001	11
第8回全日本シンクロナイズドスケーティング選手権大会2位	2001	12

大嶽真人（助手）

論文・報告書

著者名	学術論文・報告書等の名称	発表雑誌等の名称	巻	号	頁	発行年	月
大嶽真人、古賀初、田中博史、須田芳正	サッカー競技におけるハーフタイム時の状態不安について	慶應義塾大学体育研究所紀要	14	1	39 - 45	2002	1

学会発表等

発表者名	演題名	発表雑誌等の名称	抄録等	発表年	月
末永尚、吉村雅文、長谷川望、長瀬匡彦、古賀初、大嶽真人、越山賢一、石崎聡之、小坪昭仁、竹内久善	サッカーのゴールキーパーにおける6秒ルール変更に伴うプレーの影響について	日本体育学会第52回大会	大会号	494	2001 9

2. 所内定例研究会発表要旨

体育研究所では、月に1回下記の目的で研究会を行っている。

- 1) 所内の研究の活性化
- 2) 各所員の研究分野の理解
- 3) プロジェクト研究の公表

定例研究会の他、不定期で学会発表の予演会も行っている。これは、体育研究所の教員が学会で発表する際、他の教員にその内容を事前に周知させることや、発表当日までに内容をさらによく吟味するための助言を受ける場となっている。ここでは、自由な討論がかわされ発表者にとって有益に機能する。

以下に、定例で行われた研究会の発表内容について報告する。

第1回 4月10日

(1) 剣道面打ちの踏み切り動作について

望月 康司

【目 的】 本研究は、剣道面打ちの踏み切り時における左右足の地面反力、および動作分析からその特徴を検討した。

【方 法】 被検者は18～19歳の男子大学生剣道部員5名（身長 171.9 ± 1.9 cm、体重 62.4 ± 3.4 kg、剣道歴 9.8 ± 2.5 年、段位3段）であった。

被検者の右足つま先から2.15mの位置に打撃目標である面（高さ1.72m）を設置し、以下の2種類の試技を行った。①中段の構えで静止した状態から行う面打ち。②中段の構えから1歩前進し、その直後に行う面打ち。

①②ともに動作開始のタイミングは規定せず、各々の被検者に任せた。地面反力の測定には2台のフォースプレートを使用し、左右足の力発揮を測定した。フォースプレートと同期したハイスピードカメラは、被検者の左側方に設置し、毎秒250コマでビデオ撮影を行った。

【結果・考察】 動作①②において、鉛直方向 F_z および水平方向 F_y の力発揮は左足が担っており、 F_z および F_y の最大値は、全被検者で動作②が高い値を示した。

竹刀おこり時の身体角度は、動作①に比べて動作②は腰角度が大きく、膝、上体、下腿角度は小さい傾向を示し、全被検者で共通の結果であった。

竹刀おこりから打突までの時間は、全被検者において動作②が短かった。

これらの結果から、1歩前進してから打つ動作②がより踏み切りに適した動作であり、左足のより大きな力発揮を生み出すものと思われる。しかし、対人競技である剣道では、自分の動きを相手に悟られないことが重要である。その観点から考えると、動作①のような静止した状態からの打突は当然有効である。つまり、動作②での左足および身体の使い方を動作①で行えるようにすることが動作①の技術発展に役立ち、実践につながるものと考えられる。

(2) 運動後の筋硬度変化について

——サバイバルエアロビクス参加時の事例報告——

村山 光義

【目 的】 運動による一過性の疲労時や、筋損傷を伴うような運動後に筋硬度が増加するこ

とが報告されている（堀川他、1997、Murayama et al., 2000）。種々の運動形態での筋硬度変化を捉えることは、筋硬度の生理学的意義を知る上で重要である。本研究では、サバイバルエアロビクス大会参加者の下腿筋における筋硬度変化について事例報告した。サバイバルエアロビクスとは長時間に及ぶエアロビックダンスエクササイズの継続を通じてパフォーマンスレベルを競う大会である。参加者は予選、準決勝、決勝へと勝ち残り式で進出し、跳躍や走・歩動作が連続して繰り返し行われるため、下肢への負担が大きく、筋疲労やけがによるリタイアも起きることがある競技である。安全面への配慮からも下肢の筋硬度変化の様相を知ることは意義がある。

仮説：参加者から筋の張りや痙攣の訴えが多いことから、サバイバルエアロビクスを予選－決勝まで継続することは、特に下腿部の筋への負担が大きく、その筋硬度が顕著に増加する。

【方 法】 筋硬度測定：「筋弾性計：井元製作所製 PEK-1」を使用。測定部位：右脚腓腹筋最大周径囲部位の外側・内側および 1/5 下腿長遠位の計 4 点。被検者：エアロビックダンス指導経験のある女性 4 名。サバイバルエアロビクス大会プログラム：予選 30 分×6 セット（各セット間 5 分休息）、予選－準決勝間休息 30 分、準決勝 20 分×2 セット（セット間 5 分休息）、準決勝－決勝間 5 分休息、決勝 20 分×1 セット。その他：心拍記録、歩数記録も実施。被検者は審査に関係なく決勝まで運動を継続実施した。筋硬度および測定点上の周径囲を、競技開始前、セット間、終了直後、20 分後まで立位でシューズを履いた状態で計測。

【結 果】 予選から決勝までの所要時間は約 7 時間であった。しかし、その間、下腿筋硬度はいずれの被検者においても顕著な増加を示さなかった。むしろ、競技開始前を基準にすると、競技経過とともにゆるやかに減少する傾向を示した。エクササイズ中の心拍数は、平均で 120-140 拍/分、最大で 170-180 拍/分程度であった。また、総歩数は 4 名の平均で 28623 ± 891 歩であった。周径囲についても顕著な増加は認められず、競技前を基準にして変動係数 1 % 以内の僅かな変化であった。

【考 察】 本測定結果からは、仮説とした筋硬度の増加は認められなかった。周径囲の増加が認められていないことから、筋硬度を増加させる組織内の顕著な循環変化は起きなかったものと考えられる。競技開始とともに Warming-Up 効果が生じ、逆に筋硬度を低下させた可能性もあるが、筋硬度の日内変動は 10 % 程度あるという報告もある（村山、1994）。より経験の浅い対象者での調査や日内変動との関係を知ることが今後の課題であろう。

第 2 回 5 月 15 日

(1) サッカーにおけるゴールキックについて

——FIFA World Cup France 98 と Jリーグ 99 から——

大嶽 真人

【目 的】 近年のサッカーは、失点をしないようにディフェンスを強化するあまり、ゴールシーンが減少している。そのため、さまざまなルール改正が行われるようになった。その中でもゴールキーパーに関するルール改正は目覚ましいものがある。ゴールキーパーは最終守備者であるが、ゴールキーパーがボールを保持し攻守が入れ替われば攻撃の起点となる。ゴールキーパーのプレーのひとつであるゴールキックに着目し、世界のトップレベルのゴールキーパーと日本のトップレベルのゴールキーパーがどのようにゴールキックを行ってい

るのかを調査することを目的とした。

【方 法】 ワールドカップ大会フランス98でベスト4に入った国のゴールキーパー4名、現日本代表および元日本代表のゴールキーパー5名の選手を対象とした。それぞれ7試合の調査を行った。VTRによって収録された試合を、サッカーコート1/370に収縮した記録用紙にゴールキックが蹴られた場所および成功か不成功かについて記録した。サッカーコートを3に分割し、自陣1/3をDefending-Third、中盤1/3をMiddle-Third、相手陣内1/3をAttacking-Thirdとした。

【結 果】 ワールドカップベスト4のゴールキーパーはDefending-Thirdへの頻度が高い。また、より相手ゴールに近いAttacking-Thirdへの頻度が高い。日本のゴールキーパーはMiddle-Thirdへの頻度が高い。ワールドカップベスト4のゴールキーパーと日本のゴールキーパーのショートゴールキック(Defending-Third)へのパス成功率は96%であった。しかし、ロングゴールキック(Middle、Attacking-Third)へのパス成功率は34%と著しく低下した。

【考 察】 世界のゴールキーパーの方がゴールキックを簡単に奪われないショートゴールキックを多用し、自陣からのビルトアップの戦術を行っていると考えられ。また、自陣ゴールに近い危険なエリアへのパスであることから、ディフェンダーの技術が高さやチーム戦術の統一の高さが考えられる。さらに、日本のゴールキーパーよりキック力があることから、より早く簡単に相手ゴールへシュートを打てるようにロングゴールキック多用していることが考えられる。日本は、自陣からのビルトアップを行い自陣でボールを奪われるよりは、パスの成功率が低いMiddle-Thirdへのゴールキックを多用し、自陣ゴールからボールを遠ざける陣地挽回やルーズボールを獲得して攻撃を開始する戦術を行っていると考えられる。

(2) 女子大学新体操選手の減量方法について

小牧久見子

現在人々は、生活習慣病を予防するために減量方法に関心を持ち、さまざまな方法で行われている。減量方法は女子大学生の実態調査も多くなされているものの、競技者の実態調査については必ずしも多いとはいえない。そこで本研究では、減量が必要とされることが多い競技を行っている女子競技者の減量の実態を把握するために、競技上減量が必要とされる新体操選手を対象に瘦身方法の減量調査を行った。対象者は、大学および短期大学の新体操部に所属する女子大学生を対象とした。調査内容は、まず減量希望の有無を回答してもらい、次に減量の理由および減量方法について自由記述形式で複数の回答を求めた。調査期間は1999年の7月から8月であった。

本研究の結果によると減量希望は100%であった。その中にはBMIが低く、一般的には「痩せている」競技者でも減量希望があったことが興味深い。減量方法では、危険性が高い減量方法も含めて様々な方法が見受けられた。本研究の結果から女子大生は、減量したい理由が多様化していること、また、適切な減量方法を行っていない者が多いことが考えられた。したがって、栄養摂取方法や減量方法を含めた正しい知識を競技レベルに関係なく、競技者および関係者が習得することが必要であると思われる。

(1) キャンプによる自己意識の変容——大学生を対象として——

野口 和行

本研究は、1) キャンプ参加者におけるキャンプ前後の自己概念・自己意識の変容を明らかにする、2) 参加者の印象に残ったプログラム・キャンプ場面が自己概念に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

本研究の対象者は、平成12年度に行われた首都圏 K 大学のキャンプ実習に参加した大学生47名、首都圏 T 大学のキャンプ実習に参加した大学生36名であった。自己概念を測定するために、梶田が作成した自己成長性検査を使用し、自尊感情を測定するために、ローゼンバーグが作成した自尊感情尺度を使用し、それぞれ5件法で回答してもらった。調査時期はキャンプ開講式前および閉講式直前に行った。

K 大学では、自己概念の変容に関して、4つの下位尺度（達成動機、努力主義、自身と自己受容、他者のまなざしの意識）すべてにおいてキャンプ後の得点が向上し、達成動機因子において0.1%水準で有意差が見られ、自己概念総得点において有意性傾向が見られた。自尊感情については有意差がみられなかった。

T 大学では、自己概念の変容に関して、4つの下位尺度（達成動機、努力主義、自身と自己受容、他者のまなざしの意識）すべてにおいてキャンプ後の得点が向上し、達成動機、努力主義、自己概念総得点において有意差が見られた。また、自尊感情においても有意差が見られた。

以上のことから、キャンプ経験によって自己概念・自尊感情の向上が認められた。2つのキャンプで自己概念・自尊感情の変化に違いが見られた理由として、宿泊形態の違い、プログラムの違いなどが考えられる。

(2) グリップ動作を用いた一側および両側使用時の反応時間

佐々木玲子

本研究では、バーを握る動作を用いた反応課題を、「利き手単独」、「非利き手単独」、および「両手同時」の条件で遂行した。被検者（成人および学齢期前後の子ども）は、椅座位で、動作の実施にあたってはグリップの強さは意識せず、各条件ともできるだけ早く音刺激に反応して握るよう指示された。各条件における反応時間ならびにそれぞれのグリップ力を測定し、利き側、非利き側、同側における片手、両手同時条件の反応時間の比較、ならびにそれぞれで発揮した力との関係について検討した。従来、複雑な課題の反応時間は、単純な課題に対する反応時間より遅延し、片側、両側を用いた反応時間課題において同側の反応時間を比較した場合、一側での反応時間より両側での反応時間のほうが中枢処理時間に時間を要する分遅延するといわれている（両側性機能低下）。本研究において得られた測定値から片側、両側について比較すると、同側における両手での反応時間の遅延傾向は成人、子ども共に、必ずしも顕著にはみられなかった。特に子どもではみられない事例が多かった。また、利き側と非利き側においても異なる傾向が観察され、非利き側については両側で反応時間が短縮する傾向もみられた。

第4回 7月3日

(1) 全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会の現状と今後について（その2）

吉田 泰将

【目 的】 平成7年度より全日本剣道連盟は社会体育指導員養成講習会を実施してきた。これまでに初級講習会を35回、中級講習会を4回終了している。今後、上級指導員の養成を行っていくかどうか、全日本剣道連盟ではこれから討議を重ねる予定である。そこで、これまでに行われた講習会の受講者（資格受有者）の各都道府県別・各地域ブロック別数、さらに初心者（初段登録者）の数との比率より地域格差を検討し、今後の講習会実施に際しての参考資料を得ることを目的とした。

【方 法】

全日本剣道連盟平成11年度県別段位登録者比較表及び社会体育指導員養成講習会受講者統計を参考とし、検討を試みた。

【資格の受講条件】

初級：22歳以上、剣道3段以上

中級：28歳以上、剣道5段以上、初級合格後4年を経過した者

【結果・考察】

初級資格受有者が10人に満たない県が7県見られた。それらの県の初段登録者数は、近隣の県と比較しても決して低い値ではない。各地域の初段登録者と初級資格受有者の割合を比較すると、甲信越の12.7%を筆頭に、中国9.0%、東海6.1%、関東6.1%、近畿5.6%、北海道5.3%、九州5%、四国4.2%、東北3.4%という結果となった。講習会未だ実施していない県が多い地域がやはり低い値となったものと思われる。初級資格受有者の年齢は、40代36.7%、50代27.5%でその6割以上を占めている。また、段位を見ると7段21.1%、6段29.1%、5段27.1%と高段位の者が8割近くを占めている。

中級について見ると、未だ1人も受講していない道県が10見られる。地域格差も非常に大きい。講習会を実施した地域以外からの受講が少ないのが現状である。

【まとめ】

今後、上級指導者の資格認定を計画するにあたって、中級指導員及び初級指導員の数における地域格差をなくす努力を全日本剣道連盟及び各都道府県道連盟が行っていく必要がある。また、初級受講資格を20歳に引き下げるための大学教育の単位振替や免除規定の整備が必要である。さらに拡充していく講習会に対応するために、高齢化する講師陣をサポートする次世代の人材発掘・登用も急務であると思われる。

(2) 剣道における素振りの指導法について（その3）

植田 史生

平成10年から正面素振りにおける空間打突停止位置〔素振り1（右拳を右肩の高さで停止する）、素振り2（剣先が頭頂点の高さで停止する）〕における上肢動作の相違について継続的に研究を行ってきた。本研究は、素振り1、素振り2の動作を熟練者と未経験者を対象に比較検討した。

【結 果】 熟練者において素振り動作時間では、「竹刀の起こり」から「振り上げ最高」において、素振り2が短い傾向を示し、「竹刀の起こり」から「竹刀停止」までの動作時間においても同様の傾向がみられた。しかし、未経験者においては、逆の傾向がみられた。

熟練者においては、素振り 1、素振り 2 においても、振り下ろし動作時間が振りかぶり動作時間より短い傾向であった。未経験者では、素振り 1、素振り 2 においても、振りかぶり動作時間と振り下ろし動作時間があまり変わらない傾向がみられた。また、竹刀速度最高から竹刀停止までの動作時間においても同様の傾向がみられた。竹刀剣先最大速度は未経験者、有段者共に素振り 2 が速い傾向を示した。

【まとめ】

1. 竹刀停止後の筋放電量は、熟練者において素振り 1 の時、特に左の三角筋、僧帽筋に大きな筋放電がみられた。このことは、左腕が止め手になり、振りきる動作を妨げているものと思われた。2. 竹刀剣先の最大速度は、熟練者、未経験者共に素振り 2の方が大きい値を示した。また、竹刀最大速度出現時は、熟練者では竹刀停止直前にみられるが、未経験者では、竹刀振り上げ最高直後にみられた。3. 素振り動作時間において、熟練者は素振り 2 が短く、未経験者は素振り 1 が短い傾向を示した。熟練者、未経験者ともに素振り 1 は右腕を肩の高さで止めようとする動きが見られ、ブレーキをかけている動作を行っていた。また、竹刀停止後も筋放電量が大きく持続しており、次の動作への移行にも困難ではないかと考えられた。

第 5 回 10月 2 日

(1) 慶應義塾体育会ハンドボール部におけるゲームスカウティングの試み 山内 賢 はじめに

過去（1960年）に全日本インターカレッジを征した慶應義塾大学は、その後、部員数の減少が主な原因と考えられるが、徐々に低迷し、2000 年の最終的な成績は、春リーグ 3 部 4 位、秋リーグ 3 部 2 位であった。2001 年は、春リーグに優勝して 2 部に昇格、東日本インターカレッジベスト 16 で全日本インターカレッジ出場権獲得、秋リーグは、2 部での激戦を戦い抜いた。

このように、2000 年に比べて飛躍的な変身ぶりをうかがわせている。これは、選手の異常なまでの勝利に対するモチベーションの高さがその第一の要因となっているが、もう一方では、試合における戦略のスカウティングの試みも要因の一つにあげられる。スカウティングの概要を以下に説明する。

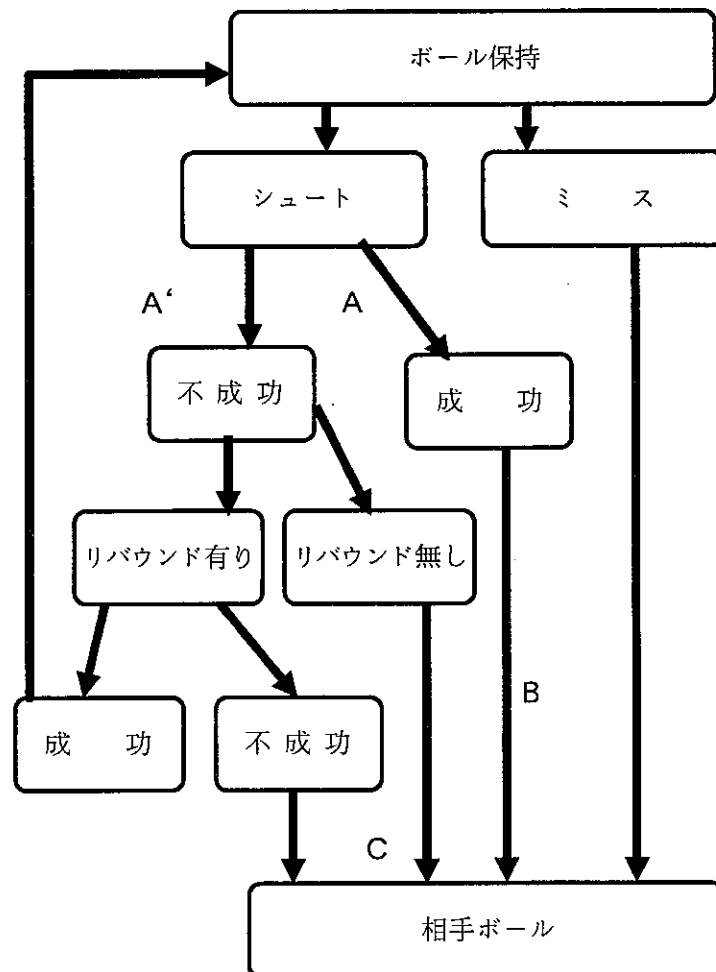
戦略のスカウティング方法とデータの還元について

記録に関わる者は、タイムマネージャー 1 名、シート記録者 2 名、ビデオ撮影者 1 名の合計 4 名である。タイムマネージャーはゲームの進行状況に合わせたプレイコールとその時の時間のコールを行う。記録者は、そのコール内容をシートに記録する。ビデオ撮影はゲーム終了後の反省ミーティングのために必要な映像を獲得するために必要なものである。ミーティングでは、視覚認知による主観的な意見交換とデータによる客観的な意見交換を行うことになる。昨年までのミーティングは、ビデオを見ることによる意見交換のみであったが、この点は、今年の現役選手における部活動の体制を大きくかえたところである。

なお、このスカウティング内容は、ゲーム中のハーフタイムにおいて、簡便な観察ができるようになっている。

以下の図は、ゲーム中に、スカウティングで抽出する戦略のデータ項目をもとにして、ハンドボールにおけるゲーム進行の様相を連鎖的に示したものであり、連鎖は、自分のチー

ムにおけるボールの保持をスタートとして、相手のチームのボール保持になるまでの課程を意味している。



例えば、選手への返還データとしては、上記の図中において、A はシュート成功率、A' はシュート不成功率、B と C は、相手のボール保持率とする。そして、これらの百分率は、チーム力の要因として考えられるので、慶應義塾のハンドボール部に還元し、チーム力の分析に役立てたいと考えている。

(2) 新たな教養教育の中での身体知の捉え方

近藤 明彦

以下は、教養教育研究会の身体知グループ（近藤明彦、横山千晶：法学部・英語、熊倉敬聡：理工学部・フランス語）で検討されてきた身体知に関する考え方をレビューしたものである。

情報技術が発達し文字・音声情報のみならず静止画像から動画までが居ながらにして手に入る時代となった。これらの高度に進化した情報技術は有効な教育手段として期待され、すでに初等教育の段階から導入されている。一方、これらの現象と対応するように実社会における様々な経験の乏しさからコミュニケーション不全、他者に対する理解思いやりの欠如等が問題となり、ボランティア・体験学習等の実体験の重要性が認識され始めている。また、機械化が進んだ工場等では熟練工の匠の技をいかに継承するかが問題となっており、数値化・

マニュアル化出来ない知の存在が今注目され始めている。

これらの事柄は、人間の身体を通した感覚・感性の重要性が改めて認識され始めたことを示すものであり、身体を通した新たな知の体系を構築する必要性があることを示している。身体知が重要と考えられるのは、このように情報技術の更なる発展により、バーチャルな体験が増え続ける事によって生ずる実体験のさらなる減少への危惧からである。

現在、我々が享受する文明社会は言語によって発展してきた。人は言語を持つことによって、抽象的思考を飛躍的に発達させてきた。そして、獲得した知識を、発話によって人から人へ、さらに文字によって時間を越えて次の世代へと継承させることを可能としたのである。我々の文明社会は、言語により継承可能となった人類の知識の積み重ねの上に成り立っているのである。文化知、社会知、科学知といった知の体系は人が言語を持つことにより初めて可能となったものである。

しかしながら口から発せられた声は耳によって聞かれ、手によって書かれた文字は目によって読まれるように、身体を介しない言葉や文字はあり得ない。これらは人の感覚器を基盤として発達してきた。言葉も文字も身体との関わりによって生まれたことを忘れてはならない。

これまで特に言語化された知に偏向した学修が中心となってきたことから、コミュニケーション能力の欠如、学修に対する興味の喪失、自らの喜怒哀楽の感情の表現の仕方が分からない等、社会常識をも含む様々な問題が表出していることも事実である。これらの様々な問題は、人が自ら体験し感動する機会の欠如が徐々に増え続けている結果であるとも考えられる。

これらの問題に対応出来るものが身体知である。身体知という名称はこれまで一般的に使われた用語ではない。からだを通して体験することにより、身体に備わった感覚を用いて感じ取ることができる。他者とのインタラクティブな関係や自らの能力の限界に挑み、自らの感覚・感性を研ぎ澄ますことにより初めて理解できる知識が存在する。身体知とは、言語化された知識の基盤部分に当たるものであり、実体験を含む応用可能な総合的な知の体系においては欠くべからざるものだと考えられる。

これまで、身体知にかかわるものとしてカリキュラムで取り上げられた科目は、体育や音楽、美術など一部の領域であった。しかしながら、自らの身体を通して体験することは決して一部の領域に限られることではない。ここで言う身体知は、各種の調査研究のためのフィールドワーク、企業でのインターンシップや各種の実験、実習等をも含むものである。

身体知とは従来の実技系科目のみならず、自らの身体感覚を通してこそ初めて経験することが出来る様々な形態を示すものである。身体知が特に重要と考えられる点は、言語化されない知の分野「暗黙知」と重なり合う点である。近年、スポーツ、音楽、舞踊から様々な業種における匠に関しての技能伝授に至るまで、暗黙知と形式知の相互を行き交うことが必須の課題となっている。

既存のカリキュラムでは理論化・言語化された知の占める割合が圧倒的に多いのだが、実はこのような言語化された知は実際の体験を通さないと再生・応用が生じ得ないものである。我々の考える新しい知の分野では、実体験を通じて既存の言語化された様々な知を再構築するという循環型のシステムを教育の現場に導入することを第一義としている。

実際これまでの座学のみ relied 教育方針では、おそらくこれからの社会動向に対応していけないことは明白であろう。最近の目まぐるしい社会の動きは、テクノロジーの発達と共

に価値観と知識体系の日々の変化をもたらしている。一般企業がサバイバルをかけてそれらに対処していているのに対し、旧態然として変わらない日本の大学のカリキュラムは大変な遅れをとっていると言わざるを得ない。このままでは社会の動きと要望に対して、大学の教育内容そのものがまったく応えることができなくなってしまうといっても過言でない。その意味でも理論と実体験の相互作用を教育の現場に入れることは必須となると考えられる。

本カリキュラム案で身体知を重要視する点は言語化された形式知の偏重ではなく形式知と暗黙知の相互を行き交うことによる二つの知のスパイラルの構築により、学修した様々な学問体系を現実社会へ応用することが初めて可能となるであろうと言う点にある。

第6回 10月16日

(1) アメリカにおける青少年のバレーボール競技会の実態

——南カリフォルニアの一例から——

石手 靖

本研究の目的は、日本におけるバレーボール競技及びスポーツ界全体が発展するための一資料を得る事にある。

方法として、南カリフォルニアで開催された 1998 MIKASA JR. BOYS CLASSIC を視察し、またその大会に出場した同一スポーツクラブに所属する 4 チームの活動を観察した。

その結果として、競技会はベスト 1 を決定するに留まらず、参加したすべてのチームが開催期間中、興味あるゲームを継続できる競技方法の実践が認められた。そして競技レベルに応じたルールの工夫が施されていることも確認できた。スポーツクラブ所属のチーム運営の印象としては、青少年へのスポーツの普及をその信念として実践されていること、また個々の持つ能力に応じたバレーボールゲームの楽しみ方を中心に指導されていることが感じられた。

(2) 大リーグの実像について

綿田 博人

華やかで力強いプレーが繰り広げられる大リーグ、特に今季は日本人選手の活躍、本塁打新記録など話題の多いシーズンであったが、その舞台裏には種々の問題を抱えているのも現状である。今回は 2、3 問題点をあげ、検討してみた。

① 年棒の高騰、② 球団の格差、③ 選手の国際化

92年、100万ドルを超えた平均年棒は、ここ10年で倍増し、その一方で90年代前半から球団間の格差が急速に広がりつつある。99年には球団格差が1億3000万ドルにまで拡大し、収支バランスを見ると昨年度は20球団が赤字に陥った。それらの球団は、思うように戦力強化を図れない状況である。打開策としては、各球団は企業努力として新球場の建設などで観客増員を図り収入像を目指す。コミッショナー諮問機関は、戦力均衡税となづけた課徴金制度案を答申した。

また、その一方で球団増加に伴い選手の實力の低下が危惧されている。

人材不足を補う手段として即戦力補強は、トレードか外国人選手の獲得のいずれかである。今シーズン出場登録選手の25%強の選手が外国人選手である。しかし、つねにビザの関係があり、選手調達も思うようにいかないのが現状である。今後のメジャーリーグの動向に注目したいと思っている。

(1) 柔道審判規定の変遷

安藤 勝英

現在、学柔連審判委員会では、もっと観て解かり易い審判法の改正について研究している。これは、前回の当研究会でも発表したことでもあるが、その一つには夫々の審判（主審、副審）が行う瞬時の「技」判定の判断技術に問題があるからである。この問題解決のため、試合中瞬時に掛けた「技」の判定を三審判（主審①、副審②）、同時ジャッジ制を試みている。

このような問題は一例であるが、もっと大きな問題として「柔道そのものが昔と違い面白くない」と言ったことも聞かれる。このことは、「ルールが変わると試合が変わる」と言われるように、これまで移行してきた審判規定と関係があると思われる。

このことから現行の審判規定が出来上がるにあたって、明治、大正、昭和、平成の現在まで、これらの時代的背景の中で、どのように改正されてきたかについて報告した。

(2) 女性とスポーツ——運動性無月経症と骨との関連——

篠原しげ子

19歳の大学生女性ランナーの仙骨・片側ストレス骨折のケースについての文献を紹介し、無月経症との関連について最近の他の研究結果も合わせて報告した。

今回の女性ランナーの場合、下背部の痛みを訴えて診断を受け、最終的に仙骨、片方のストレス骨折と診断されたがその診断の経過と治療の過程を紹介している。ストレス骨折の原因としてこの女性は無月経歴3年、貧血、低体重、胃腸からの出血などの病歴があった。その上食事制限をしており、過去に摂食障害を経験していることから、女性アスリートの triad（摂食障害、無月経、骨密度の減少）が窺われた。ホルモンの状態は低エストロゲンレベルで骨密度が低下していた。骨折の治療として、完全休養から引き続き違った種類のトレーニングを行った。陸上ランニングを避け水中ジョギング、自転車、水泳、固定式クロスカン トリースキーなどを行った。無月経の対策として、教育・カウンセリングをおこない、5%運動強度を減らし、カロリーとカルシウム摂取量を増やし、ホルモンを回復させる事で月経の周期を回復した。

運動が月経に及ぼす影響は様々な月経時の症状に関してよりも周期に及ぼす影響が大きい。黄体期を短縮させたり、無排卵を起こす。無排卵はエストロゲンレベルを下げ、骨密度の低下の要因になる。無月経は1970年代のフィットネスブーム、女性の積極的なスポーツ活動への参加で注目されるようになった。運動による無月経の原因は一つの理由だけで現れるのではなく、多くの要因が重なって起こる。初期の研究では、痩せていることと激しい運動が重なることが原因と考えられたが、最近では視床下部の働きが注目されている。この系の腺の分泌の変化は卵胞ホルモンの分泌を抑えエストロジェンの生産を減少させる。エストロジェンの低下は無月経や希発月経の原因の一つであるが、月経異常の原因を特定するのは難しい。それは体脂肪や栄養、ストレスの影響が考えられ、運動の種類、強度や頻度も含め、個人差が考えられる。

閉経後の女性もエストロジェンの分泌が無くなるので同じように骨密度の低下がすすみ、骨折の危険が多い。若いうちに骨密度が低下した状態では閉経後が心配である。運動は骨密度を増やすという報告があるが、それに安心せず、摂食障害、（拒食、過食）無月経、骨密度の低下という悪循環を断ち切るような早期での教育を指導者、教員が行う必要がある。

参考文献 Journal of Athletic Training 2000; 35 (4) 453~457 Sacral Stress Fracture in

第8回 12月4日

(1) バスケットボール指導現場におけるゲーム分析、スカウティングについて 加藤 大仁

ゲームにおける各プレイヤー、チームのパフォーマンスを評価するにあたっては、コーチ、プレイヤーによる主観的要素が入り込むのは当然のことである。しかしわが国のバスケットボール界における指導現場の歴史をみると、極めて主観的な評価が下されるばかりで、ゲームの結果を客観的に評価しようとする発想が持たれてこなかったように思われる。そこで今回は NBA や NCAA に所属しているチームのゲーム分析、スカウティングがいかになされているかを紹介し、今後の課題等も探った。

NBA、NCAA レベルではボックス・スコア、ショット・チャート等基本的なデータはもとより、各プレイヤーの特徴などもデータとして表せるものは客観的に示されている。またチームによっては Lineup Analysis など進めており、コーチの主観と実際のゲーム・パフォーマンスとのギャップも評価可能となっている。

このように客観的なデータを集めることによって、各プレイヤー、チームに具体的な目標を提示できるようになるが、現在行なわれているゲーム・パフォーマンスの評価はオフェンス中心になされている傾向があるように思われる。これはオフェンスでのパフォーマンスのほうが数字で表しやすいからであろう。しかし例えば自チームのディフェンスを評価しようとするのであれば、各チームのディフェンス・シナリオに対応した評価方法を開発していく必要であろう。またリバウンド参加回数など、数字に表れない部分をいかに評価していくかも今後の課題となろう。

(2) 「青少年の体力レベルにおける一考察」 松田 雅之

青少年（13歳～18歳）の体力レベルの推移を見てみると、過去20年の文部科学省のスポーツテスト結果から、特に跳躍系種目のレベルの停滞が著しいことがわかった。また、陸上競技の男子走り幅跳び（中学生）と 100m 走の全国50傑を調査してみても、100m 走の記録向上に比べ、走り幅跳びでは、過去20年間殆ど記録の向上がみられなかった。青少年の体格的要素からみても、平均身長は20年間で確実に伸びており、この結果がどのような原因から起きているのかを推測した。

1. 生活様式の変化に伴う脚伸展筋群の低下。
 - * 昔に比べ、家庭における椅子生活が起因しているのか？
 - * 正座やあぐらをしなくなったこと。
 - * 洋式トイレの普及。
2. 小学校、中学校での体育カリキュラムの変容。
3. 現代人の食生活の変化。
 - * カルシウム等の不足。

以上のような要素を報告したが、青少年における形態的側面や、他の体力テスト項目との比較検討も必要であり、現代人の脚力不足の原因を探る為には更に多くの要因について検討する必要があると示唆された。

第9回 1月15日

(1)「スポーツ事故判例報告」

「スキューバダイビング講習中の受講者溺水事件における

インストラクターの過失と免責同意書の有効性について」 高嶺 隆二

事件の概要

1997年（平成9年）8月2日、沼津市太瀬崎海岸で行われたスキューバダイビングのCカード取得のための講習会に参加していた受講生の一人である女子学生Aが講習中に溺れ、海底に沈んでいるところを付近に居合わせたダイバーの家族に発見され、救助されたが「高次脳機能障害」という重い後遺症を負った。このことに対して、平成10年、当該女子学生は講習会を主催する会社（N社）と講習を担当したインストラクター（O・E）を相手に1億8360万円余の損害賠償を求める裁判を起こした。

この事件について、東京地方裁判所は、被告会社ならびに被告インストラクターの過失を認め、1億5990万円余の賠償を命じた。

「平成13年6月20日東京地方裁判所判決」

「平成10年（ワ）19478号損害賠償請求事件」

◎当 事 者 ◇原告 A（現在24歳 女子大生）

◇被告 株式会社N（Cカード講習会の主催者；O・Eの使用人）

O・E（本件講習のインストラクター）

なお、原告は、幼少よりスイミングスクールに通い、水泳の技能は高かったがスキューバダイビングは、今回が初めての体験であった。

ここでは、担当インストラクターの過失と「免責同意書」の有効性について論じた。

被告らの責任

◆インストラクターO・Eの過失責任

① スキューバダイビング未経験者に対して、安全なプール講習を経る事なく、最初から海中でプール実習及び海洋実習を行った。

初めてダイビングの器具、装備を着用したばかりで操作に不慣れな受講生は、受講中にその操作を誤ったり種々の混乱を引き起こす危険性があり、そのことを予見して深刻な事態を防止する注意義務があった。

② 目標のフロートに向かって当初は背泳ぎをしながら引率したが、途中で前方を向いて泳ぎながら5～7秒に1回程度しか振り返って確認しなかったために受講生の動向の把握が不十分となって原告の溺水に気づかなかった。

③ 受講生にバディ（2人組）を組ませ、相互に注意するようにさせたが、全くの初心者では自分のことで精一杯になりがちであることは容易に推認でき、相互監視を本件受講者に求めること事態に無理があった。

④ 本件受講生がいずれも初めてスキューバダイビングを体験することを承知していながら、受講生の動静を常に注視し、異常が発生した場合には直ちに適切な救護を行うべき義務を負っていたにも拘らず、原告が溺れたことに気づかず直ちに救護出来なかったことは重大な過失と言わざるを得ない。

◆免責同意書の有効性

① スキューバダイビングは、ひとつ間違えば直ちに生命に関わる危険のあるスポーツで

あり、経験の乏しい受講生を対象にして、対価を得て講習会を開催する場合、専門的知識と経験を有する講師において受講生の安全を確保すべきは当然の要請である。

- ② 然るに、人間の生命・身体のように極めて重大な法易に関し、免責同意者が被免責者に対する一切の責任追及を予め放棄するという内容の免責条項は、被告らに一方的に有利なもので、社会通念上その合理性を到底認め難い。
- ⑧ 免責同意者が被免責者の故意、過失にかかわらず一切の請求権を予め放棄するという内容の免責条項は、少なくともその限度で公序良俗に反し、無効と言わざるを得ない。
- ④ 事故は、インストラクター O・E の重大な過失によるものであり、被告の主張する免責条項の有効性には理由はない。

◆インストラクターと株式会社 N の責任

被告会社が、被告インストラクター O・E の使用者であることは、当事者の間に争いのない事実であるから、被告インストラクターは民法第 709 条により、その使用者である被告会社は民法第 715 条により、損害を賠償すべき義務を負うべきである。

(2) 筋の収縮特性を意識的に活かしたレジスタンストレーニングの実践

(ウエイト・トレーニング)——ベンチ・プレスとスクワット—— 今栄 貞吉

上半身の代表的なトレーニング種目である ベンチ・プレスと下半身の代表的なトレーニング種目であるスクワットについて筋の Concentric contraction、Eccentric contraction、Isokinetic contraction、Isometric contraction を意識的に活かしたトレーニング法の実践を、筆者が被写体になっているビデオをもとに説明し検討をおこなった。

ベンチ・プレス

両腕を伸ばす際

- 1) 動作にあわせて呼気をおこなう
- 1) 大胸筋と上腕三頭筋のコンセントリックな収縮を特に意識
- 1) 拮抗筋である広背筋と上腕二頭筋のエクセントリックな収縮を意識

両腕を曲げる際

- 1) 動作にあわせて吸気をおこなう
- 1) 広背筋と上腕二頭筋のコンセントリックな収縮を特に意識
- 1) 拮抗筋である大胸筋と上腕三頭筋のエクセントリックな収縮を意識

スクワット

両膝を伸ばす際

- 1) 動作にあわせて呼気をおこなう
- 1) 大腿四頭筋と大臀筋のコンセントリックな収縮を特に意識
- 1) 大腿二頭筋と下腿三頭筋のエクセントリックな収縮を意識
- 1) 腹筋と背筋をしっかりとブロックする (アイソメトリックな収縮)

両膝を曲げる際

- 1) 動作にあわせて吸気をおこなう
- 1) 大腿二頭筋と下腿三頭筋のコンセントリックな収縮を意識
- 1) 太腿四頭筋と大臀筋のエクセントリックな収縮を意識
- 1) 腹筋と背筋をしっかりとブロックする (アイソメトリックな収縮)

3. 浅野基金研究補助による研究成果報告

研究課題 剣道における正面素振り動作のバイオメカニクス的研究

研究責任者 吉田泰将

研究協力者 植田史生 望月康司

研究実績の概要

【研究の目的】 筆者らは、剣道における基礎的技術としての素振りについて、現代剣道の実践に有効な指導方法について検討を行ってきた。本研究の目的は、素振り動作の中で、竹刀振り上げ最高時の竹刀角度及び竹刀停止位置に着目し、それぞれの振りかぶり方4タイプの相違点、停止位置の2タイプの相違点を比較検討することである。この研究補助により、新たに初心者者のデータも集積でき、熟練者のデータ数も多く集積できた。

【研究成果】 剣道における正面素振り動作のバイオメカニクス的研究——素振り動作の振りかぶり位置の違いによる検討——(2002年4月体育研究所研究会発表)

【要 旨】 目的：素振り動作の中で「剣先の停止位置」および「振りかぶり最高時の剣先位置」の指導内容の相異による素振り動作の変化について検討することである。今回は、「振りかぶり最高時の剣先位置」の違いによる検討を行った。

【結 果】

1. 竹刀停止位置は270度(素振り①)を除き、指示した角度よりも大きくなる傾向が顕著であった。
2. 竹刀の剣先速度は竹刀停止位置の角度と関係が見出せた。230度付近に最大値を持つ2次曲線を示した。また、最終局面(第8局面)の所要時間についても、同様の曲線関係を示し、230度付近で所要時間が短くなる傾向を示した。この傾向は、非熟練者ではやや弱く、ばらつきが大きく見られた。
3. 竹刀と前腕のなす角度(手首角度)に注目すると、最終局面において特徴的な角度の変化が見られた。

【考 察】 振り上げ最高時の竹刀角度をイメージ通りに行うことが困難なことが明らかになった。身体の背後での振り上げは、指示通りのイメージを持っても、かなりオーバースイングになる傾向が示された。振りかぶり方を指導する場合には、角度を小さめに指示し、オーバースイングを計算に入れ、なお且つ振りかぶり角度が230度前後になるよう調整すると竹刀剣先のスピード増加に寄与できるものと考ええる。

【今後の課題】 今回集積したデータを活用し、実際の自由な素振りとの比較などから、さらに最も竹刀剣先がスピードをもって移動できる振りかぶり最高時の竹刀角度を追求していきたい。また、筋電図の分析による振り上げから振り下ろしに移行する局面の筋放電の状態を知り、振りかぶり角度との関係を見出したいと考える。

第2部 教育分野

概 要

大学設置基準の緩和を受けて、各学部の学則が変更された1993年以降、体育研究所では、塾生すべてに対して保健体育科目履修の門戸を開くべく様々な形式のスポーツ・運動活動の実践の場ならびに、その理論の理解の場を提供してきた。

教育分野に関しては、多彩なスポーツ種目等がプログラムされている実技科目のみならず、講義科目においては、体育研究所教員の専門性を生かして、人文・社会科学的、あるいは自然科学的な視点に立ったアプローチからのさまざまな理論の展開をしてきた。

これまで、学生のニーズに合わせた様々な改革を行っており、毎年8000名から9000名を超える履修学生数を確保してきた。しかしながら設置された科目の中には履修者数が極端に少なくこのままの状態では学習効果が期待できないような科目が出てきていることも事実である。教育部門ではこのような状況を打開すべく、履修学生数が漸減している体育実技Ⅱ（シーズン・スポーツ）の科目の体育実技Ⅰ（ウィークリー・スポーツ）への移行等をはじめとした改革を開始したところである。

以下に掲載の資料は、体育研究所設置科目である「保健体育科目（保健衛生・体育理論・体育実技Ⅰ・体育実技Ⅱ）」の平成13年度担当者ならびに履修統計である。また、通信教育部については、夏期・冬期のスクーリングにおける「体育実技開講科目および担当者一覧」、「体育理論担当者一覧」等を掲載した。

さらに、体育実技の履修者による授業評価のアンケート結果について、「体育実技Ⅰ（春学期・秋学期）」、「体育実技Ⅱ」それぞれ種目別の集計と自由記述による塾生からの意見を掲載した。

1. 体育理論（スポーツサイエンス）と保健衛生（ヘルスサイエンス）

各講義名と担当者及び履修者数を表1-1（体育理論）、表1-2（保健衛生）に示す。

表1-1 平成13年度 体育理論（スポーツサイエンス）のテーマ及び担当者

講義名	コマ数 春 秋 計	担 当 教 員	履修 者数
スポーツ心理学における俗説と真理	1 1 2	近藤明彦	44
アウトドアを考える	1 1	村山光義・野口和行	10
ライフセービング	1 1	山内 賢	22
アスリートのためのスポーツ医・科学	1 1	近藤明彦・佐々木玲子・大西洋平（スポーツ医学研究センター）	34
スポーツの効用を多目的にみる	1 1	村山光義・佐々木玲子・吉田泰将・近藤明彦	27
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1 1	吉田泰将	40
身体の動きをはかる	1 1	佐々木玲子・村山光義・望月康司	7
健康・体力へのアプローチ	1 1	今栄貞吉・安藤勝英・山内 賢	9
スポーツ上達の基礎知識	1 1	植田史生・石手 靖・村山光義	7
スポーツと国家・法	1 1	高嶺隆二・加藤大仁	15

表1-2 平成13年度 保健衛生（ヘルスサイエンス）のテーマ及び担当者

講義名	コマ数 春 秋 計	担 当 教 員	履修 者数
生活習慣病の正しい知識とその予防	1 1	河邊博史	8
親準備学（子どもの心身の成長と発達）	1 1 2	木村慶子	32
環境と健康	1 1	斎藤郁夫	11
病気の予防とライフスタイル	1 1	辻岡三南子	11
遺伝・環境と現代病	1 1	南里清一郎	5
医学概論	1 1 2	橋本治雄	24
体重コントロールと諸問題	1 1	広瀬 寛	5
災難を避けるための医学的基礎	1 1	森 正明	8
内科学談義	1 1	森木隆典	12
知的飲酒のすすめ	1 1	横山裕一	8
心臓病の基礎知識	1 1	和井内由充子	4

2. 体育実技（スポーツクラス）

体育実技は、体育実技Ⅰ（ウィークリースポーツクラス）と体育実技Ⅱ（シーズンスポーツクラス）に分けられる。表2-1にウィークリースポーツクラスの担当者とそれぞれの担当種目、表2-2、3にはそれぞれ、ウィークリースポーツクラス、シーズンスポーツクラス各種目の履修統計を示す。

表2-1 平成13年度 体育実技Ⅰ（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種 目
教 授	橋本 治雄	ゴルフ
〃	今栄 貞吉	体力UPコース
〃	高嶺 隆二	水泳、体力UPコース
〃	近藤 明彦	陸上競技、ジョギング、テニス、ウォーキングエクササイズ
〃	安藤 勝英	柔 道
助 教 授	篠原しげ子	ダンス
〃	植田 史生	剣 道
〃	綿田 博人	野球、ゴルフ
〃	松田 雅之	陸上競技、ジョギング、体力UPコース、卓球
〃	佐々木玲子	エアロビクス、テニス
専 任 講 師	石手 靖	バレーボール
〃	山内 賢	ハンドボール、バスケットボール、体力UPコース
〃	吉田 泰将	剣道、体力UPコース
〃	加藤 大仁	バスケットボール
〃	村山 光義	バレーボール、ニュースポーツ、フライングディスク
〃	野口 和行	ニュースポーツ、バレーボール、アウトドアレクリエーション
助 手 (嘱 託)	望月 康司	ソフトボール
〃	小牧久見子	エアロビクス、ソフトテニス
〃	大嶽 真人	サッカー
スポーツ医学センター	勝川 史憲	ウォーキングエクササイズ
非 常 勤 講 師	上向 貫志	サッカー
〃	内田 順	サッカー
〃	遠藤 千草	ソフトボール
〃	岡部 英紀	合気道
〃	加藤 幸司	バドミントン
〃	木塚 孝幸	バスケットボール
〃	後藤 完夫	アメリカンタッチフットボール
〃	小林 徹	バレーボール
〃	小森 康加	水 泳
〃	白井 巧	バドミントン
〃	鈴木 智子	エアロビクス
〃	須田 芳正	フットサル
〃	砂押 雅夫	ボクシング
〃	田中 伸明	テニス
〃	田中由美子	フェンシング
〃	谷口こゆき	バスケットボール
〃	手島智佳子	テニス
〃	内藤 尚男	ソフトテニス
〃	野口 祥一	弓 術
〃	濱名 邦雄	ソフトテニス
〃	平井 克英	バドミントン
〃	藤平 信一	合気道
〃	堀場 雅彦	テニス
〃	宮田 幸典	トランポリン
〃	村松 憲	テニス
〃	山田美絵子	バレーボール
〃	吉田 武	卓 球
〃	吉村 和純	ホッケー

表 2-2 平成13年度 体育実技 I (ウィークリースポーツクラス) 種目別履修状況

地区	科 目 名	コ マ 数			定 員	登 録 数	倍 率	履修者数	充 足 率
		春学期	秋学期	計					
日 吉 地 区 開 設	アウトドアレクリエーション	1	1	2	60	16	0.27	20	33%
	アメリカンタッチフットボール	1	1	2	80	28	0.35	34	43%
	アーチェリー	1	1	2	40	79	1.98	49	123%
	ウォーキングエクササイズ	1	1	2	60	64	1.07	64	107%
	エアロビクス	9	9	18	450	410	0.91	393	87%
	ゴルフ	7	7	14	310	459	1.48	282	91%
	サッカー	12	12	24	930	714	0.77	755	81%
	ジョギング	2	2	4	120	62	0.52	90	75%
	ソフトテニス	3	3	6	120	45	0.38	73	61%
	ソフトボール	8	8	16	480	562	1.17	541	113%
	ダンス	4	4	8	160	133	0.83	140	88%
	テニス	14	14	28	620	911	1.47	619	100%
	トランポリン	1	1	2	40	46	1.15	46	115%
	ニュースポーツ	3	3	6	180	70	0.39	126	70%
	バスケットボール	15	15	30	1020	1030	1.01	919	90%
	バドミントン	9	9	18	580	714	1.23	590	102%
	バレーボール	14	12	26	930	731	0.79	844	91%
	ハンドボール	2	2	4	160	53	0.33	64	40%
	フェンシング	2	2	4	80	29	0.36	34	43%
	フットサル	2	2	4	100	228	2.28	107	107%
	フライングディスク	1	1	2	40	28	0.70	43	108%
	ボクシング	1	1	2	60	119	1.98	64	107%
	ホッケー	1	1	2	60	0	0	0	0%
	剣道	8	8	16	320	111	0.35	126	39%
	合気道	1	1	2	80	86	1.08	85	106%
	柔道	3	3	6	180	89	0.49	101	56%
	水泳	8	1	9	270	132	0.49	150	56%
	体力UPコース	9	10	19	440	350	0.80	381	87%
	卓球	5	5	10	300	315	1.05	297	99%
	野球	2	2	4	120	122	1.02	125	104%
	陸上競技	2	2	4	120	33	0.28	40	33%
	日吉合計	152	144	296	8510	7769	0.91	7202	85%
三 田 地 区 開 設	ダンス	1	1	2	60	81	1.35	79	132%
	テニス	5	5	10	132	238	1.80	214	162%
	バレーボール	4	4	8	200	127	0.64	127	64%
	弓術	2	2	4	80	137	1.71	80	100%
	剣道	2	2	4	80	49	0.61	50	63%
	合気道	1	1	2	60	86	1.43	85	142%
	柔道	2	2	4	120	68	0.57	68	57%
	三田合計	17	17	34	732	786	1.07	703	96%
全	体 合 計	169	161	330	9242	8555	0.93	7905	86%

表 2-3 平成13年度 体育実技Ⅱ（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科 目 名	担 当 者	定 員	登録数	倍 率	許可数	履修者数	充 足 率
春 学 期	7 月	アメリカンタッチフットボール	綿引 賢	40	4	0.10	4	6	15%
		ウェイトリフティング	武井 澄男	10	1	0.10	1	1	10%
		空 手	蓮池 陽輔	50	25	0.50	25	30	60%
		弓 術	丸山祐一郎	40	54	1.35	44	42	105%
		サ ッ カ ー	小森 秀二	50	13	0.26	13	13	26%
		少 林 寺 拳 法	中島 正樹	20	19	0.95	19	19	95%
		水 泳	北村公光嗣	100	40	0.40	40	42	42%
	8 月	卓 球	野尻 聡	50	29	0.58	29	45	90%
		軟 式 野 球	小松 恭三	50	38	0.76	38	42	84%
		馬 術	中村 護	40	72	1.80	40	41	103%
		バスケットボール	木塚 孝幸	75	26	0.35	26	34	45%
		バドミントン	平井 克英	100	62	0.62	62	75	75%
		ホ ッ ケ ー	吉村 和純	30	6	0.20	6	6	20%
		ボクシング	砂押 雅夫	30	18	0.60	18	26	87%
	9 月	ヨ ッ ト	斎藤 渉	40	25	0.63	25	30	75%
		ラ グ ビ ー	小野寺 孝	30	4	0.13	4	5	17%
秋 学 期	9 月	合 気 道	江口 久	35	47	1.34	35	35	100%
		アウトドアレクリエーション	野口 和行	50	49	0.98	49	50	100%
		器 械 体 操	宮崎 正巳	20	17	0.85	17	19	95%
		剣 道	清水 誠治	20	3	0.15	3	6	30%
		ゴ ル フ	佐藤 努	60	52	0.87	52	63	105%
		山 岳	岩永 治朗	50	16	0.32	16	16	32%
		新 体 操	寺沢 宣隆	20	9	0.45	9	10	50%
		自 動 車	松山 保幸	60	24	0.40	24	28	47%
		柔 道	安藤 勝英	30	7	0.23	7	7	23%
		ソフトテニス	梶川 則夫	100	14	0.14	14	17	17%
		端 艇	月村 繁雄	20	8	0.40	8	8	40%
		テ ニ ス	堀場 雅彦	80	39	0.49	39	46	58%
		ハンドボール	上西 啓之	20	5	0.25	5	6	30%
		バレーボール	石手 靖	40	14	0.35	14	15	38%
		レスリング	増田 康二	15	8	0.53	8	9	60%
	2 月	ス キ ー	吉田 久男	200	61	0.31	61	61	31%
		ス ケ ー ト	福水 田夫	40	25	0.63	25	28	70%
				1615	834	0.52	780	881	55%

3. 通信教育部対象の保健体育科目

(1) 体育実技

平成13年7月31日（火）～8月7日（火）の日曜を除く7日間、日吉キャンパスにて午前中の2時間実施した。また、スキーは、平成14年2月2日（土）～6日（水）、長野県飯山市戸狩温泉スキー場にて実施した。

各種目担当者及び履修状況を表3-1に示す。

表3-1 平成13年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種 目 名	定 員	履修者数	充足率	担 当 者
夏 期	剣 道	30	10	33.3%	植田史生
	柔 道	30	9	30.0%	安藤勝英
	ウォーキングエクササイズ	30	33	110.0%	近藤明彦
	レジャースポーツ	50	34	68.0%	野口和行
	バスケットボール	50	46	92.0%	山内 賢
	バレーボール	40	31	77.5%	小林 徹
	エアロビクス	60	55	91.7%	佐々木玲子
	ボールルームダンス	25	24	96.0%	篠原しげ子
	キャリスセニックス	20	24	120.0%	今栄貞吉
	サ ッ カ ー	30	23	76.7%	大嶽真人
	水 泳	80	34	42.5%	高嶺隆二
	バドミントン	25	24	96.0%	加藤幸司
冬期	ソフ ト ボ ー ル	25	24	96.0%	綿田博人
	ス キ ー	70	42	60.0%	水野英夫
	合 計	565	413	73.1%	

(2) 体育理論

4名の教員によるオムニバス形式で、夏期スクーリング中に7回（1時限100分）行われた。各教員のテーマを表3-2に示す。

表3-2 平成13年度通信教育部講義開講科目および担当者一覧

	担 当 者	テ ー マ
保 健 衛 生	斎藤 郁夫	高血圧
	河邊 博史	糖尿病
	和井内由充子	虚血性心疾患
	辻岡三南子	医学とスポーツ
	木村 慶子	親準備学
	南里清一郎	エイズ
体 育 理 論	今栄 貞吉	健康・体力へのアプローチ
	近藤 明彦	スポーツ・身体運動の科学的基礎
	安藤 勝英	スポーツと文化
	高嶺 隆二	体育・スポーツ活動中の事故と法的責任

また、今年度のレポートならびに試験問題の提出は、松田雅之、吉田泰将、村山光義の3名が担当した。

4. 平成13年度体育実技（スポーツクラス）履修者アンケート集計結果

体育研究所では、より適切な授業展開のための基礎的資料を得ることを目的に、体育実技を履修した学生による授業に対する評価（アンケート）を実施している。その結果を、ウィークリースポーツクラス（春・秋学期）、シーズンスポーツクラスに分けて示した。アンケートの回答数および各質問項目の具体的内容は、それぞれ表4-1、表4-2に示したとおりである。

表4-1 アンケート回答者数

	アンケート総数
ウィークリー春学期	2558
ウィークリー秋学期	2103
シーズン	555

表4-2 アンケート項目

目 的	授業の目的・目標はよく理解できた。
教授法	教員の教授方法は適切であった。
知 識	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた。
興 味	授業の内容は興味のあるものであった。
運動量	運動量は十分であった。
準 備	教員の授業に対する準備は十分であった。
対教員	授業において教員とのコミュニケーションはよく取れた。
学生間	授業において学生間のコミュニケーションはよく取れた。
意 欲	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ。
満 足	この授業は自分にとって満足できるものであった。
推 薦	この授業を他の学生にも薦めたい。
生 涯	この種目を生涯スポーツとして取り入れたい。
施 設	利用施設は十分であった。
用 具	用具は十分であった。
雨天時	天候等の不都合により、通常の実施場所で授業ができなかった場合のプログラムは適切であった（施設変更があった種目のみ対象）。
* 費 用	実技費用はどうでしたか。
* 集 合	集合方法はどうでしたか。

*合宿種目のみ対象

アンケートの各質問項目に関しては、「強くそう思う」を5点、「そう思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「そう思わない」を2点、「まったくそう思わない」を1点として得点化することにより5段階評価をした。また、合宿種目については、「費用」と「集合場所」についても加えて尋ね、それぞれ、「安い」を3点、「普通」を2点、「高い」を1点、および、「良い」を3点、「普通」を2点、「悪い」を1点として得点化することにより、3段階評価をした。

図4-1と図4-2は、ウィークリースポーツクラス（春・秋学期）、シーズンスポーツクラス各々における、各質問項目の全体の平均値と標準偏差を棒グラフに示したものである。それぞれについて、簡単に解説する。

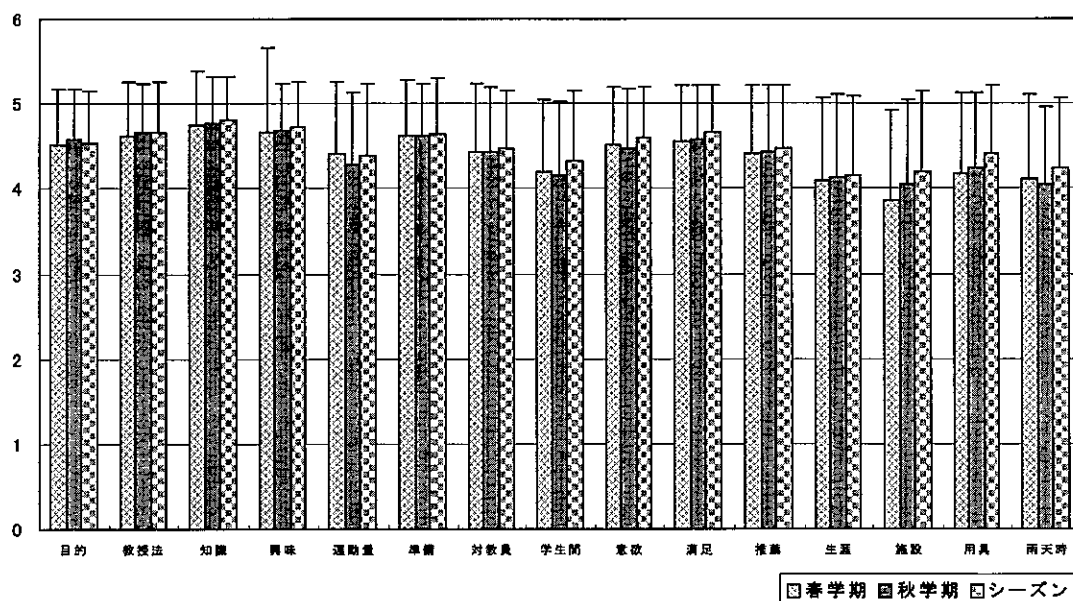


図4-1 授業に関する質問項目別の5段階評価 (全体平均)

全般に4点以上の肯定的評価がほとんどであった。但し、授業での運動量の満足感、授業中における学生間のコミュニケーションの実態、体育実技において設定した運動種目に対する生涯的な継続願望、授業用に用意された用具や運動施設における不満（特にウィークリースポーツクラス）、そして、普段の運動施設が何らかの要因で利用できなかった時の運動プログラムの適正度に関する得点が全体の中で、やや低く評価されていることが見受けられる。

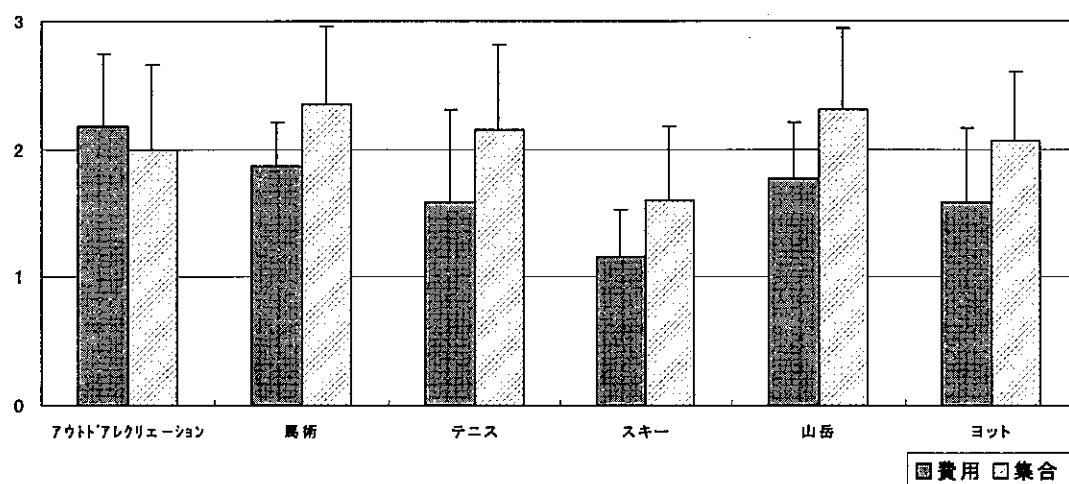


図4-2 合宿種目における費用と集合場所の3段階評価

合宿種目における費用に関しては、アウトドアレクリエーションと馬術を除き、高いと評価されているようである。中でもスキーに関しては、特に合宿費用が高いと感じているようである。集合場所に関しては、スキーの集合場所にやや不満を感じているようである。上記のことは、今後、原因を追求しつつ、解決の手段を追求することが望ましいと思われる。

その他、ウィークリースポーツクラス（春・秋学期）、シーズンスポーツクラス各々について、種目別にみた5段階評価を表3、表4、表5に示した。

表4-3 5段階評価集計一覧（春学期ウィークリースポーツクラス）

種 目 名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具	雨天時
アーチェリー	平均	4.5	4.7	4.8	4.7	3.5	4.7	4.4	3.8	4.3	4.6	4.2	3.6	3.7	3.9	
	17 SD	0.6	0.5	0.4	0.5	1.1	0.5	0.6	0.8	0.8	0.5	0.9	0.8	0.8	0.8	
合 気 道	平均	4.6	4.8	4.8	4.8	4.3	4.8	4.5	4.3	4.6	4.8	4.7	3.9	4.2	4.5	
	73 SD	0.6	0.4	0.6	0.4	0.8	0.4	0.8	0.9	0.6	0.4	0.6	0.9	0.9	0.7	
アウトドアレクリエーション	平均	4.3	4.7	4.8	4.9	4.1	4.7	4.8	4.8	4.8	4.9	4.9	3.7	4.6	4.3	4.3
	12 SD	0.9	0.7	0.6	0.3	0.9	0.7	0.4	0.4	0.6	0.3	0.3	0.8	0.7	0.7	1.0
ウォーキングエクササイズ	平均	4.5	4.5	4.8	4.5	4.1	4.6	4.6	4.0	4.4	4.4	4.4	4.1	4.0	4.2	3.7
	31 SD	0.7	0.6	0.5	0.7	0.9	0.6	0.6	0.8	0.8	0.7	0.7	0.9	0.9	0.9	1.1
エアロビクス	平均	4.6	4.9	4.9	4.7	4.6	4.8	4.6	4.2	4.6	4.7	4.7	3.9	3.6	4.2	
	165 SD	0.6	0.3	0.4	0.5	0.6	0.5	0.7	0.8	0.6	0.5	0.6	0.9	1.2	0.9	
弓 術	平均	4.4	4.7	4.8	4.6	3.7	4.7	4.4	3.1	3.9	4.3	4.6	3.4	4.4	4.7	
	9 SD	0.5	0.5	0.4	0.7	1.0	0.7	0.7	1.2	1.2	0.7	0.5	1.3	0.7	0.5	
弓 術(三田)	平均	4.9	4.9	4.9	5.0	4.2	4.9	4.6	3.5	4.2	4.8	4.7	4.2	4.9	4.8	
	13 SD	0.3	0.3	0.3	0.0	0.8	0.3	0.5	1.1	0.7	0.4	0.5	0.9	0.3	0.4	
剣 道	平均	4.4	4.7	4.9	4.8	4.2	4.6	4.5	4.3	4.3	4.5	3.9	4.0	4.4	4.6	
	48 SD	0.7	0.5	0.4	0.4	0.8	0.5	0.7	0.7	0.7	0.6	1.0	0.9	0.9	0.6	
剣 道(三田)	平均	4.6	4.9	5.0	4.9	4.5	4.9	4.8	4.4	4.4	4.8	4.8	4.6	4.9	4.9	
	10 SD	0.5	0.3	0.0	0.3	1.0	0.3	0.4	0.7	1.1	0.4	0.4	0.7	0.3	0.3	
ゴ ル フ	平均	4.2	4.3	4.6	4.6	4.0	4.1	3.9	3.9	4.6	4.5	4.5	4.5	3.9	4.3	4.2
	61 SD	0.7	0.6	0.6	0.6	0.8	0.8	0.8	0.9	0.6	0.6	0.7	0.7	0.9	0.8	1.0
サ ッ カ ー	平均	4.4	4.6	4.7	4.7	4.4	4.5	4.4	4.1	4.3	4.4	4.4	4.3	3.5	4.0	4.2
	163 SD	0.7	0.6	0.7	0.7	0.9	0.7	0.7	0.9	0.8	0.8	0.8	0.9	1.2	1.0	0.9
柔 道	平均	4.7	4.8	5.0	4.9	4.9	4.8	4.8	4.4	4.8	4.9	4.3	4.1	4.8	4.7	
	36 SD	0.5	0.6	0.0	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.5	0.4	1.1	0.8	0.4	0.6	
柔 道(三田)	平均	4.7	4.9	5.0	4.8	4.8	4.8	4.9	4.7	4.6	4.8	4.3	4.1	4.8	4.7	
	16 SD	0.6	0.3	0.0	0.4	0.4	0.4	0.3	0.6	0.5	0.4	0.8	1.1	0.6	0.6	
ジョギング	平均	4.7	4.9	4.7	4.5	4.0	4.5	4.3	3.9	4.3	4.6	4.0	4.0	3.7	3.6	4.4
	27 SD	0.6	0.5	0.6	0.8	1.0	0.7	0.8	1.0	0.8	0.6	0.8	0.8	0.8	1.0	0.5
水 泳	平均	4.7	4.8	4.8	4.8	4.4	4.8	4.7	4.4	4.6	4.8	4.5	4.6	4.2	4.5	4.6
	99 SD	0.4	0.4	0.5	0.5	0.8	0.5	0.5	0.8	0.7	0.5	0.8	0.7	1.0	0.7	0.6
ソフトテニス	平均	4.9	4.9	4.8	4.9	4.7	4.8	4.8	4.5	4.8	4.9	4.8	4.7	4.6	4.7	3.9
	17 SD	0.3	0.2	0.4	0.3	0.6	0.4	0.4	0.7	0.4	0.2	0.6	0.6	0.6	0.5	0.9
ソフトボール	平均	4.4	4.6	4.7	4.7	4.4	4.6	4.4	4.2	4.5	4.5	4.4	3.9	3.7	3.8	4.1
	184 SD	0.7	0.6	0.5	0.6	0.8	0.5	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	1.0	1.1	1.1	1.0
体力UPコース	平均	4.7	4.7	4.8	4.6	4.2	4.7	4.4	3.6	4.4	4.5	4.3	3.9	4.3	4.2	
	126 SD	0.5	0.5	0.4	0.5	0.7	0.6	0.8	0.9	0.7	0.6	0.8	0.9	0.8	0.8	
卓 球	平均	4.5	4.5	4.3	4.5	4.1	4.4	4.1	3.8	4.5	4.4	4.2	3.9	3.1	4.2	
	68 SD	0.5	0.6	0.8	0.6	0.9	0.7	0.8	0.9	0.6	0.7	0.8	1.0	1.1	0.8	
タッチフットボール	平均	4.7	4.7	4.9	4.7	4.6	4.4	4.8	4.7	4.7	4.8	4.5	3.8	3.9	4.2	3.7
	10 SD	0.5	0.5	0.3	0.5	0.7	1.0	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.9	1.0	0.8	0.9
ダ ン ス	平均	4.4	4.5	4.8	4.5	4.0	4.6	4.2	4.4	4.4	4.4	4.2	3.9	3.6	3.9	
	74 SD	0.6	0.7	0.6	0.6	0.9	0.6	0.8	0.7	0.8	0.6	0.9	0.9	1.1	0.9	
テ ニ ス	平均	4.4	4.5	4.8	4.7	4.4	4.6	4.4	4.3	4.5	4.4	4.4	4.5	4.3	4.2	4.0
	188 SD	0.6	0.6	0.4	0.5	0.8	0.6	0.7	0.8	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.9	0.9
テ ニ ス(三田)	平均	4.7	4.9	4.9	4.9	4.3	4.9	4.7	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	3.4	4.1	4.1
	54 SD	0.6	0.3	0.3	0.5	0.9	0.4	0.5	0.6	0.9	0.7	0.7	0.6	1.4	1.0	1.0
トランポリン	平均	4.5	4.8	4.9	4.7	4.1	4.9	4.7	4.6	4.7	4.5	4.6	3.4	3.6	3.6	
	19 SD	0.6	0.4	0.3	0.5	1.0	0.3	0.6	0.6	0.7	0.8	0.6	1.0	1.2	1.3	
ニュースポーツ	平均	4.5	4.6	4.5	4.3	3.8	4.4	4.6	4.3	4.5	4.5	4.4	3.4	3.8	4.4	4.5
	37 SD	0.6	0.6	0.8	0.7	1.2	0.7	0.7	0.8	0.5	0.7	0.8	1.1	0.9	0.7	0.8
バスケットボール	平均	4.6	4.6	4.8	4.8	4.7	4.7	4.3	4.3	4.6	4.7	4.5	4.4	3.6	4.1	
	247 SD	0.6	0.6	0.6	0.5	0.7	0.6	0.8	0.8	0.6	0.6	0.8	0.8	1.4	1.1	
バドミントン	平均	4.5	4.6	4.8	4.6	4.6	4.7	4.4	4.2	4.5	4.5	4.4	4.0	3.9	4.2	
	265 SD	0.6	0.6	0.5	0.6	0.7	0.6	0.8	0.9	0.7	0.7	0.8	1.0	1.0	0.9	
バレーボール	平均	4.5	4.5	4.6	4.6	4.4	4.5	4.4	4.3	4.5	4.5	4.4	3.9	3.6	4.2	3.9
	346 SD	0.6	0.7	0.7	0.6	0.8	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.8	1.0	1.2	0.9	1.1
ハンドボール	平均	4.4	4.6	4.9	4.8	4.8	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.0	3.9	4.4	4.6	
	25 SD	0.7	0.6	0.3	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.5	1.0	1.0	0.8	0.8	
フェンシング	平均	4.8	4.9	4.9	5.0	4.7	4.9	4.8	4.4	4.6	4.9	4.6	4.1	4.1	4.5	
	14 SD	0.4	0.3	0.3	0.0	0.7	0.3	0.4	0.7	0.5	0.3	0.7	0.8	0.9	0.5	
フットサル	平均	4.5	4.7	4.8	4.7	4.4	4.7	4.1	3.9	4.5	4.6	4.4	4.4	4.0	4.6	
	29 SD	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.6	0.9	0.9	0.6	0.5	0.7	0.8	0.9	0.6	
フライングディスク	平均	4.5	4.6	4.7	4.6	4.0	4.4	4.4	4.1	4.4	4.5	4.7	3.9	3.8	4.4	4.4
	17 SD	0.5	0.5	0.8	0.6	0.9	0.6	0.7	0.8	0.8	0.8	0.6	0.9	1.0	0.7	0.5
ボクシング	平均	4.7	4.6	4.8	4.9	4.8	4.6	4.3	3.7	4.6	4.9	4.7	3.3	4.0	4.0	
	27 SD	0.6	0.6	0.8	0.3	0.5	0.7	0.8	0.9	0.8	0.4	0.5	1.2	0.9	0.8	
野 球	平均	4.1	4.4	4.7	4.8	4.4	4.4	4.1	4.2	4.0	4.3	4.0	4.1	4.1	4.2	3.6
	21 SD	0.7	0.5	0.7	0.4	0.8	0.7	0.9	0.6	1.0	0.9	0.9	1.0	1.0	0.9	1.4
陸 上	平均	4.8	4.8	4.9	5.0	4.5	4.6	4.5	4.5	4.7	5.0	3.3	3.8	4.0	3.8	4.4
	10 SD	0.4	0.4	0.3	0.0	0.8	0.5	0.5	0.5	0.5	0.0	1.1	0.9	0.8	0.8	0.7

表4-4 5段階評価集計一覧(秋学期ウィークリースポーツクラス)

種 目 名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具	雨天時
アーチェリー	11	平均 4.6 SD 0.7	4.7 0.5	4.8 0.4	4.9 0.3	4.0 0.8	4.7 0.5	4.5 0.7	4.3 0.9	4.8 0.4	4.9 0.3	4.6 0.5	4.2 0.9	4.2 0.6	4.5 0.7	4.3 0.5
合 気 道	48	平均 4.7 SD 0.5	4.9 0.4	4.9 0.5	4.7 0.4	3.7 1.1	4.7 0.6	4.6 0.6	4.2 0.8	4.3 0.8	4.6 0.6	4.6 0.6	4.0 0.9	4.5 0.7	4.5 0.7	
アウトドアレクリエーション	2	平均 4.5 SD 0.7	5.0 0.0	5.0 0.0	4.5 0.7	4.0 0.0	4.0 0.0	4.5 0.7	4.5 0.7	4.5 0.7	4.5 0.7	4.5 0.7	4.5 0.7	3.5 2.1	4.0 1.4	3.5 0.7
アメリカンタッチフットボール	8	平均 5.0 SD 0.0	5.0 0.0	5.0 0.0	5.0 0.0	4.9 0.4	4.9 0.4	5.0 0.0	5.0 0.0	4.8 0.7	4.9 0.4	4.9 0.4	4.5 0.8	4.8 0.5	4.9 0.4	4.4 0.9
ウォーキングエクササイズ	26	平均 4.6 SD 0.5	4.6 0.6	4.7 0.5	4.8 0.4	3.8 0.7	4.7 0.5	4.5 0.7	4.2 0.8	4.6 0.6	4.8 0.5	4.8 0.6	4.5 0.9	3.8 0.9	3.9 1.0	4.7 0.5
エアロビクス	148	平均 4.7 SD 0.5	4.9 0.3	4.9 0.5	4.8 0.4	4.6 0.6	4.9 0.5	4.6 0.6	4.0 0.9	4.6 0.6	4.8 0.4	4.8 0.4	4.1 0.8	4.1 0.9	4.3 0.8	
キャリスセニックス	64	平均 4.9 SD 0.3	5.0 0.2	4.9 0.4	4.8 0.4	4.3 0.8	4.8 0.4	4.6 0.6	3.5 1.0	4.4 0.8	4.6 0.6	4.5 0.7	4.2 0.8	4.3 0.8	4.3 0.8	
剣 道	43	平均 4.5 SD 0.5	4.8 0.4	4.9 0.3	4.7 0.5	4.4 0.8	4.8 0.4	4.7 0.6	4.3 0.8	4.5 0.7	4.5 0.7	4.2 0.8	4.0 1.0	4.6 0.5	4.6 0.6	
剣 道(三田)	9	平均 4.6 SD 0.5	5.0 0.0	4.9 0.3	5.0 0.0	4.0 0.9	5.0 0.0	4.8 0.4	4.6 0.5	4.2 0.7	4.8 0.4	4.9 0.3	4.9 0.4	4.9 0.3	4.9 0.3	
ゴ ル フ	40	平均 4.4 SD 0.5	4.3 0.6	4.7 0.5	4.5 0.5	3.7 0.9	4.3 0.8	4.0 0.7	4.0 1.0	4.5 0.5	4.5 0.6	4.3 0.7	4.5 0.7	4.0 0.9	4.2 0.8	
サ ッ カ ー	184	平均 4.5 SD 0.6	4.6 0.5	4.7 0.6	4.6 0.6	4.4 0.9	4.5 0.7	4.3 0.9	3.9 0.9	4.3 0.8	4.4 0.7	4.4 0.8	4.2 1.0	3.6 1.1	4.1 0.9	4.0 0.9
柔 道	44	平均 4.8 SD 0.5	4.9 0.3	5.0 0.0	4.9 0.4	4.7 0.6	4.8 0.5	4.9 0.4	4.6 0.6	4.6 0.8	4.9 0.4	4.5 0.9	4.5 0.9	4.8 0.5	4.6 0.8	4.7 0.8
ジョギング	23	平均 4.6 SD 0.6	4.7 0.5	4.9 0.4	4.5 0.7	4.2 0.8	4.5 0.7	4.1 0.9	3.6 0.9	4.4 0.7	4.4 0.7	4.0 0.9	4.2 0.8	4.0 0.8	4.0 0.9	4.1 0.8
水 泳	11	平均 4.7 SD 0.5	5.0 0.0	4.9 0.3	4.9 0.3	4.6 0.7	4.9 0.3	4.7 0.6	4.3 0.8	4.5 1.0	4.7 0.6	4.5 0.9	4.6 0.7	4.8 0.4	4.6 0.5	
ソフトテニス	14	平均 4.6 SD 0.5	4.7 0.5	5.0 0.0	4.8 0.6	4.5 0.5	4.7 0.6	4.6 0.6	4.3 0.6	4.3 0.6	4.8 0.4	3.9 0.9	4.1 0.9	4.1 1.4	4.6 0.8	3.9 0.8
ソフトボール	154	平均 4.5 SD 0.7	4.6 0.6	4.7 0.6	4.8 0.5	4.3 0.7	4.6 0.5	4.4 0.8	4.1 0.9	4.5 0.7	4.6 0.6	4.5 0.7	4.1 1.0	3.9 0.9	3.9 0.9	4.1 1.0
体力 up コース	62	平均 4.6 SD 0.6	4.7 0.5	4.6 0.7	4.4 0.6	4.2 0.6	4.5 0.6	4.3 0.8	3.3 0.9	4.1 0.7	4.4 0.7	3.9 0.9	3.4 1.1	4.2 0.8	4.3 0.7	
卓 球	80	平均 4.6 SD 0.5	4.5 0.6	4.5 0.7	4.6 0.7	4.1 0.9	4.5 0.6	4.2 0.8	4.3 0.8	4.5 0.7	4.6 0.7	4.5 0.7	4.1 1.1	4.0 1.0	4.3 0.8	
ダ ン ス(三田)	19	平均 4.6 SD 0.6	4.7 0.5	4.9 0.3	4.8 0.4	4.3 0.9	4.8 0.4	4.6 0.7	4.6 0.7	4.7 0.5	4.6 0.5	4.6 0.6	4.2 0.8	4.2 0.9	3.9 1.1	
ダ ン ス(日吉)	43	平均 4.4 SD 0.7	4.5 0.6	4.7 0.6	4.5 0.7	4.2 0.9	4.7 0.6	4.3 1.0	4.4 0.9	4.5 0.7	4.6 0.7	4.2 0.9	4.2 0.9	4.0 1.0	4.1 1.0	
テ ニ ス(日吉)	162	平均 4.5 SD 0.6	4.6 0.6	4.8 0.5	4.7 0.5	4.1 0.9	4.5 0.6	4.5 0.7	4.2 0.8	4.5 0.6	4.6 0.6	4.5 0.7	4.5 0.7	4.3 0.8	4.3 0.9	4.1 0.9
テ ニ ス(三田)	46	平均 4.7 SD 0.5	4.9 0.3	5.0 0.0	4.9 0.4	4.3 0.9	4.8 0.5	4.9 0.3	4.7 0.6	4.8 0.5	4.8 0.4	4.8 0.5	4.8 0.4	3.7 1.4	3.8 1.2	4.4 0.9
トランポリン	14	平均 4.7 SD 0.6	4.7 0.5	4.8 0.4	4.8 0.4	4.1 0.7	4.6 0.6	4.7 0.6	4.4 0.9	4.8 0.6	4.6 0.6	4.7 0.5	3.4 1.1	3.8 1.1	3.7 1.1	
ニュースポーツ	33	平均 4.5 SD 0.6	4.7 0.5	4.5 0.8	4.6 0.7	3.5 1.3	4.5 0.6	4.5 0.6	4.2 0.7	4.3 0.9	4.4 0.7	4.2 0.8	3.5 1.1	3.8 1.0	4.6 0.6	4.5 0.6
バスケットボール	249	平均 4.7 SD 0.6	4.7 0.6	4.8 0.5	4.8 0.5	4.6 0.7	4.7 0.6	4.4 0.9	4.1 0.9	4.6 0.6	4.6 0.7	4.5 0.9	4.4 0.9	4.2 1.0	4.4 0.9	
バドミントン	202	平均 4.6 SD 0.6	4.7 0.6	4.8 0.6	4.6 0.6	4.4 0.8	4.7 0.6	4.4 0.8	4.3 0.8	4.5 0.7	4.6 0.7	4.5 0.8	4.1 1.0	4.3 0.8	4.3 0.8	
バレーボール	244	平均 4.5 SD 0.7	4.4 0.7	4.5 0.7	4.5 0.6	4.0 0.9	4.4 0.7	4.3 0.8	4.2 0.8	4.4 0.7	4.5 0.7	4.3 0.8	3.8 1.1	3.7 1.1	4.1 0.8	3.7 1.0
バレーボール(三田)	17	平均 4.6 SD 0.5	4.9 0.3	4.8 0.5	4.8 0.4	4.2 1.0	4.8 0.6	4.9 0.3	4.9 0.3	4.6 0.7	4.5 0.6	4.5 0.8	3.9 1.3	3.6 1.4	4.0 1.3	4.1 0.9
ハンドボール	20	平均 4.4 SD 0.6	4.6 0.7	5.0 0.2	4.6 0.7	4.7 0.6	4.9 0.4	4.6 0.6	4.1 0.9	4.3 0.9	4.6 0.7	4.3 0.8	3.6 1.1	4.7 0.5	4.8 0.4	
フェンシング	12	平均 4.6 SD 0.5	4.7 0.5	5.0 0.0	4.9 0.3	4.8 0.4	4.5 0.7	4.8 0.4	4.5 0.8	4.7 0.5	4.8 0.5	4.5 0.5	3.8 0.8	3.7 1.2	3.8 1.1	
フットサル	26	平均 4.6 SD 0.5	4.8 0.4	5.0 0.2	4.8 0.4	4.3 0.8	4.7 0.5	4.1 0.9	3.9 0.9	4.5 0.8	4.5 0.8	4.6 0.7	4.3 0.9	3.9 1.1	4.4 0.7	
フライングディスク	17	平均 4.6 SD 0.5	4.9 0.3	5.0 0.0	4.5 0.6	3.6 1.1	4.5 0.5	4.4 0.6	4.2 0.7	4.2 0.7	4.5 0.7	4.2 1.0	3.5 1.1	3.9 1.2	4.2 1.0	3.6 1.2
ボクシング	10	平均 4.5 SD 0.5	4.8 0.4	4.8 0.4	4.7 0.5	4.2 1.0	4.7 0.5	4.6 0.5	3.9 0.9	4.4 0.8	4.4 0.5	4.3 0.7	3.9 0.9	3.5 1.0	3.7 1.3	
野 球	8	平均 4.8 SD 0.5	5.0 0.0	4.9 0.4	4.6 0.5	4.4 0.5	4.4 0.5	5.0 0.0	4.8 0.5	5.0 0.0	4.8 0.5	4.6 0.5	4.8 0.5	4.8 0.5	4.8 0.5	4.0 0.0
陸上競技	10	平均 4.6 SD 0.5	5.0 0.0	5.0 0.0	4.9 0.3	4.7 0.5	4.7 0.5	4.9 0.3	4.7 0.5	4.5 0.5	4.8 0.4	3.6 0.7	3.9 1.1	4.2 0.8	4.5 0.7	4.3 1.0

表 4-5 5 段階評価集計一覧 (シーズンスポーツクラス)

種 目 名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具	雨天時	費用	集合
テ ニ ス	平均	4.8	4.9	4.9	4.7	4.8	4.9	4.7	4.7	4.9	4.7	4.6	4.6	4.5	4.7	4.75	1.6	2.2
	34 SD	0.4	0.3	0.3	0.7	0.6	0.5	0.6	0.5	0.4	0.6	0.7	0.7	0.9	0.6	0.71	0.7	0.6
合 気 道	平均	4.5	4.9	4.7	4.9	4.1	4.9	4.7	4.5	4.5	4.7	4.7	3.8	4.6	4.5			
	15 SD	0.6	0.4	1.0	0.4	1.1	0.4	0.5	0.6	0.6	0.6	0.5	1.0	0.6	0.8			
バドミントン	平均	4.6	4.6	4.9	4.7	4.4	4.7	4.2	4.3	4.7	4.7	4.5	4.4	4.4	4.7			
	46 SD	0.6	0.7	0.3	0.6	0.9	0.7	0.9	0.7	0.6	0.6	0.7	0.8	0.8	0.5			
ゴ ル フ	平均	4.3	4.3	4.5	4.5	4.1	4.2	4.2	4.4	4.4	4.5	4.3	4.4	4.0	4.1	4.00		
	34 SD	0.6	0.7	0.7	0.6	0.8	0.9	0.7	0.7	0.7	0.6	0.8	0.8	0.9	0.8	0.87		
山 岳	平均	4.6	5.0	5.0	4.9	4.5	4.8	4.7	4.6	4.7	4.9	4.8	4.5	4.9	4.8	4.60	1.8	2.3
	13 SD	0.8	0.0	0.0	0.3	0.8	0.6	0.5	0.7	0.5	0.3	0.6	0.8	0.3	0.4	0.89	0.4	0.6
新 体 操	平均	4.6	4.4	5.0	5.0	4.8	5.0	5.0	4.8	5.0	4.8	4.4	3.8	4.6	4.2			
	5 SD	0.5	0.5	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	0.9	0.4	0.5	0.8			
器 械 体 操	平均	4.6	4.8	4.9	5.0	4.4	4.8	4.8	4.9	4.9	5.0	4.9	3.7	4.9	4.9			
	10 SD	0.5	0.4	0.3	0.0	0.5	0.4	0.4	0.3	0.3	0.0	0.3	1.3	0.3	0.3			
バレーボール	平均	4.7	4.9	4.9	4.8	4.5	4.7	4.6	4.6	4.7	4.8	4.6	4.1	4.3	4.5	3.86		
	15 SD	0.5	0.4	0.4	0.4	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5	0.4	0.5	1.1	0.8	0.6	0.66		
自 動 車	平均	4.4	4.6	4.8	4.8	3.8	4.4	4.5	4.2	4.7	4.7	4.4	4.1	4.1	3.9			
	14 SD	0.6	0.6	0.4	0.4	0.9	0.6	0.5	0.9	0.6	0.5	0.8	0.8	0.8	1.1			
ハンドボール	平均	4.0	4.3	5.0	4.7	4.7	4.3	3.7	3.0	4.3	4.0	4.0	3.7	4.0	4.7			
	3 SD	0.0	1.2	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6	1.0	0.6	1.0	1.0	1.2	1.0	0.6			
アウトドアレクリエーション	平均	4.4	4.7	4.8	4.6	4.1	4.9	4.6	4.7	4.6	4.7	4.6	3.8	4.0	4.4	4.36	2.2	2.0
	38 SD	0.6	0.5	0.4	0.6	1.1	0.4	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.9	1.1	0.8	0.84	0.6	0.7
レスリング	平均	4.5	4.5	4.8	5.0	3.5	4.5	4.5	4.0	4.8	4.8	3.8	4.0	4.8	4.3			
	4 SD	0.6	0.6	0.5	0.0	0.6	0.6	0.6	1.2	0.5	0.5	1.0	0.0	0.5	0.5			
弓 術	平均	4.6	4.7	4.7	4.8	4.0	4.6	4.5	4.2	4.6	4.7	4.7	3.9	4.4	4.3			
	32 SD	0.6	0.5	0.5	0.4	1.0	0.6	0.7	0.9	0.6	0.5	0.6	0.9	0.8	0.7			
サ ッ カ ー	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	4.7	4.6	4.9	4.9	4.8	4.8	4.2	4.3			
	9 SD	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.5	0.5	0.3	0.3	0.4	0.4	0.7	0.7			
軟 式 野 球	平均	4.8	4.9	5.0	4.9	4.6	4.9	4.7	4.6	4.7	4.8	4.7	4.7	4.5	4.6			
	31 SD	0.4	0.3	0.2	0.2	0.5	0.3	0.4	0.6	0.5	0.4	0.5	0.7	0.6	0.6			
タッチフットボール	平均	4.4	4.4	5.0	4.4	4.4	4.6	4.6	4.2	4.2	5.0	4.4	3.8	4.4	5.0			
	5 SD	0.5	0.5	0.0	0.5	0.9	0.5	0.5	1.1	0.4	0.0	0.9	0.4	0.5	0.0			
ボクシング	平均	4.6	4.9	4.7	4.8	4.7	4.7	4.5	3.6	4.3	4.6	4.4	3.6	4.2	4.5			
	18 SD	0.5	0.3	0.6	0.4	0.8	0.5	0.6	0.8	0.7	0.6	0.7	1.0	0.6	0.6			
ウェイトリフティング	平均	4	4	4	4	5	4	5	3	4	4	4	4	4	5			
	SD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
ホ ッ ケ ー	平均	4	4	5	4	5	5	5	3	4	4	4	3	5	5			
	1 SD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
少林寺拳法	平均	4.8	4.6	5.0	4.7	4.6	4.7	4.6	4.2	4.8	4.8	4.4	3.1	4.1	3.9			
	10 SD	0.4	0.5	0.0	0.5	0.8	0.5	0.5	0.8	0.4	0.4	0.8	1.2	0.7	1.2			
空 手	平均	4.9	5.0	5.0	5.0	4.7	4.9	5.0	4.3	5.0	4.9	4.9	3.9	4.7	4.8			
	17 SD	0.3	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2	0.0	1.4	0.0	0.5	0.2	0.9	0.8	0.4			
卓 球	平均	4.0	3.9	4.5	4.3	4.2	3.9	3.8	4.0	4.2	4.3	4.0	3.5	2.9	3.8			
	27 SD	0.7	0.9	0.7	0.8	0.9	1.1	0.9	0.9	0.8	0.7	0.8	1.1	1.2	1.0			
バスケットボール	平均	4.7	4.8	5.0	4.7	4.7	4.8	4.5	4.3	4.8	4.7	4.7	4.3	4.2	4.5			
	33 SD	0.5	0.4	0.2	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7	0.4	0.5	0.6	0.8	1.0	0.8			
ヨ ッ ト	平均	4.4	4.6	4.5	4.6	4.0	4.5	4.2	4.3	4.5	4.7	4.3	3.7	3.6	4.3	1.6	2.1	
	29 SD	0.7	0.5	1.0	0.6	0.8	0.8	0.7	0.7	0.6	0.5	0.8	0.9	0.9	0.8	0.6	0.5	
馬 術	平均	4.6	4.9	4.8	4.9	4.2	4.8	4.6	4.7	4.8	4.8	4.9	4.1	3.9	4.6	1.9	2.4	
	32 SD	0.7	0.3	0.7	0.3	0.9	0.5	0.6	0.5	0.4	0.4	0.3	1.1	1.0	0.6	0.3	0.6	
水 泳	平均	4.5	4.7	4.8	4.5	4.4	4.7	4.4	4.0	4.4	4.6	4.5	4.7	4.4	4.4			
	24 SD	0.7	0.6	0.4	0.7	0.9	0.5	0.8	0.8	0.6	0.5	0.6	0.6	0.8	0.9			
ス キ ー	平均	4.3	4.4	4.8	4.7	4.6	4.5	4.3	4.0	4.3	4.5	3.8	4.6	3.9	3.8	1.2	1.6	
	44 SD	0.7	0.8	0.4	0.6	0.6	0.8	0.7	1.1	0.6	0.7	0.9	0.5	1.0	1.1	0.4	0.6	
剣 道	平均	4.8	4.8	5.0	5.0	5.0	5.0	4.6	3.8	4.6	4.4	3.2	4.2	5.0	4.8			
	5 SD	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.8	0.5	0.5	1.3	1.1	0.0	0.4			
柔 道	平均	4.8	5.0	4.8	4.8	4.7	5.0	4.8	4.0	4.5	4.3	3.8	4.7	5.0	4.8			
	6 SD	0.4	0.0	0.4	0.4	0.8	0.0	0.4	0.9	0.8	0.5	1.0	0.5	0.0	0.4			

本アンケートでは、質問項目による段階評価以外にも、自由記述方式で授業全般、履修手続き、授業の環境（運動施設および用具）等の回答を求めた。ここから得られた意見については、各種目別において様々な意見があったが、全般に共通した主な内容を略記する。

授業全般について

楽しかった。授業内容が良かった。また、履修したい。専門的な運動・スポーツに関する知識が向上した。自己の体力の現状を知ることができた。体力アップに役立った。休講や施設変更の連絡方法に関する不満。雨天時における授業内容の工夫に対する要望。武道種目における稽古着の貸し出しシステムの導入と道具のサイズへの不満。シーズンスポーツのスキー種目における指導員に対する、スキー場内でのマナーへの不満。スノーボードの種目開設への欲求。履修人数が少なかったために、運動の興味が減退したことへの不満。等

履修手続きについて

秋学期にも追加履修手続きがあればいい。卒業認定単位の増加希望。三田の科目（種目）の増設。日吉以外のキャンパスで配布される履修案内や時間割に関する体育実技の情報量の不足。等

施設について

グラウンドの整備を望む（陸上競技場の芝、屋外のバレーボールコート）。更衣室の美化。個人ロッカーの設置の希望。施設が遠いので、シャトルバス等の配慮がほしい（下田地区）。空調・換気施設が欲しい（卓球場、記念館、体育会の室内施設）。授業以外の運動施設の自由開放（プール、トレーニングルーム、記念館、陸上競技場）。休暇中の運動施設開放。三田の運動施設の開発。炎天下での授業における日よけの場所（テント）の要求。運動施設に隣接する水飲み場が欲しい。等

用具について

ゼッケンが不潔である。道具が壊れている。道具が古い。道具が足りない。

その他

合宿種目の集合場所までの交通機関を大学で用意して欲しい。

合宿種目の費用をもっと安くして欲しい。

人気種目のコマを増やすことによって抽選を緩和して欲しい。

まとめ

履修者の身体活動に関する欲求はかなりのものであり、体育実技の授業そのものには満足しているようである。しかし、履修者は、さらなる学習環境の充実（運動施設と用具の整備、授業外や休暇中に運動施設を開放する欲求、授業数の増設、）や、時代にそった新しいスポーツ種目の開設（ビーチバレーボール、スノーボード）を要望しているので、体育研究所はこれらの要望に添えるように今後努力が必要となる。

第3部 スポーツ振興分野

概 要

大学として、スポーツという文化の振興に寄与するために、本年度、実践した行事について報告する。

1. スポーツ大会

1) KEIO Ball-Games Festa 2001（平成13年度入学歓迎行事）

開催日：平成13年4月7日（土）、及び4月28日（土）

開催時間：10：00～16：00（4／7は11：00開始）

会場：日吉陸上競技場

コメント：

今年度は、慶應義塾大学入学歓迎行事運営会議の協力を得て、地域住民への開催に関する告知として、日吉キャンパス周辺世帯に対して、新聞折込広告（4／14（土）朝日及び読売新聞、計18000世帯）を配布するとともに、神奈川新聞でのイベント紹介（4／27（金）掲載）等を実施した。その効果により、当日はキャンパス周辺の家族連れも見られ、天候にも恵まれたとても良い雰囲気イベントとなった。

しかしながら、塾生の参加が予想外に少なかったことが残念であり、イベントの企画運営方法等を検討する必要性を感じた。



開催日	時間	種 目	参加者数	観客数
4／7（土）	11：00～13：00	アルティメットゲーム 横浜国立大学 VS 慶應ホワイトホーンズ	30	90
	14：00～16：00	ラクロスゲーム（男子） 千葉大学 VS 慶應大学男子ラクロス部	70	50
		合 計	100	140
4／28（土）	10：00～15：00	フィールドバレーボール体験コーナー	30	
	〃	ファミリーコーナー（ピッチングマシン、的当てゲーム他）	50	
	10：00～13：00	フラッグフットボール体験コーナー	5	
	〃	ソフトラクロス体験コーナー	60	
	〃	フライングディスク体験コーナー（ディスクゴルフ等）	20	
	〃	ミニサッカー体験コーナー	20	
	13：00～14：00	フラッグフットボールゲーム リクルートジュニアシーガルズ VS 慶應義塾幼稚園舎	50	

開催日	時 間	種 目	参加者数	観客数
4/28(土)	13:00-14:00	タッチフットボールゲーム 慶應高校アメリカンフットボール部紅白戦	20	
	14:00-14:40	女子ラクロスゲーム 慶應大学女子ラクロス部紅白戦	30	
	14:40-15:20	アルティメットゲーム 慶應ホワイトホーンズ現役 VS OB 戦	20	
	15:20-16:00	男子ラクロスゲーム 慶應大学男子ラクロス部 VS 慶應高校ラクロス部	60	
	アルティメットゲーム ハーフタイム時1回	ジャズダンスサークル SIG	10	
	ラクロスゲーム ハーフタイム時2回	チア&ソングリーディング UNICORNS	7	
		合 計	382	200

協力団体及び代表者名（敬称略）：

大塚製薬(株)：三科他／日本ラクロス協会：早川他／体育会アメリカンフットボール部：光山他／体育会所属団体男子ラクロス部・女子ラクロス部：角田・丸山他／独立団体ホワイトホーンズ：岡本／独立団体チア&ソングリーダーズ UNICORNS：八木他／文化団体連盟放送研究会：鈴木他／ジャズダンスサークル SIG：内田他／幼稚園フラッグフットボールチーム：浜野他／大会運営学生スタッフ：源他

2) 春のレクリエーション

開催日：平成13年4月9日（月）～14日（土）

開催時間：11:30～14:00

会 場：日吉陸上競技場

コメント：

新学期のガイダンス期間中を利用し、気軽にできるスポーツの場の提供を目的に、「春のレクリエーション」と銘打ったイベントを開催した。一週間天候に恵まれたが、ミニサッカーの参加者が予想外に少なかった。

種目及び参加者数等：

日 付	時 間	内 容	参加チーム	参加者数	観客数
4/9(月)	11:30-14:00	ラクロス	慶應義塾大学女子ラクロス部	20	60
		フィールドバレーボール		12	
		ミニサッカー		3	
4/10(火)	11:30-14:00	フィールドバレーボール		23	50
		ミニサッカー		0	
4/11(水)	11:30-14:00	フィールドバレーボール		24	50
		ミニサッカー		2	
4/12(木)	11:30-14:00	フィールドバレーボール		15	60
		ミニサッカー		0	
		フライングディスク		3	
4/13(金)	11:30-14:00	フィールドバレーボール		60	120
		ミニサッカー		10	
		フライングディスク		20	
		ホッケー	体育会女子ホッケー部	4	
4/14(土)	11:30-13:00	フィールドバレーボール		6	20
		ミニサッカー		0	
		フライングディスク		1	
		キャッチボール		2	
		合 計		205	360

3) 2001 塾長杯フットサル大会

開 催 日：平成13年 5 月26日（土）

開催時間：12：10～19：30（受付・開会宣言～閉会宣言）

会 場：日吉記念館

参加チーム数：35チーム

参加者数：約 400 名（選手 351 名、観客約50名）

ゲーム数：全52ゲーム（1 ゲーム、15分間）

1 チームのゲーム数：最低 2 ゲーム、最高 6 ゲーム

協 力：大塚製薬(株)／放送研究会／KEIO フットサルクラブ／大会運営学生スタッフ

表彰チーム：

優 勝 修羅軍（新田智昭君（理工3）他）

準優勝 KEIO フットサルクラブ（臼井康博君（法2）他）

第3位 F. C. PIERROT（高山直史君（総3）他）

コメント：

今回ははじめて E-mail のみにて参加申込を受付、その着信順に計36チーム（1 チーム当日棄権）の大会となった。結果として、全キャンパス、全学部からの出場となった。この大会が塾生の間で定着してきたことを感じさせるように、申込は短期間の内に募集チーム数に達し、チームのレベルも非常に高いものだった。

また、はじめて放送研究会の音響機器担当である K. Sound の全面的な協力をうけて、場内放送を充実する事が適った。そして放送席では、放送研究会の鈴木芳彦君（商3）ら4名の塾生アナウンサーが楽しいトークを繰り広げ会場を盛り上げ、またチア&ソングリーディング UNICORNS のダンスも大会に花を添えた。

そして大会の運営を自発的に補助してくれた源堅一郎君（経4）ら10名の塾生グループは、今後のこのような学内競技会の開催にとって頼り甲斐のある存在となった。

4) 塾長杯バレーボール大会

開 催 日：平成13年10月20日（土）

開催時間：11：00～18：30

会 場：日吉記念館

参加チーム数：33（経験者グループ15、初心者グループ18）

参加者数：約 400 名（選手 288 名、観客約 100 名）

ゲーム数：49ゲーム

1 チームのゲーム数：最低 2 ゲーム、最高 5 ゲーム

表彰チーム：

経験者グループ 優 勝 慶應牧場（小幡慎太郎君（理工2）他）

準優勝 ほらね〜ズ（奥俊介君（理工4）他）

第3位 真ッ裸我リヤ（近藤重邦君（理工3）他）

初心者グループ 優 勝 しゅぽぽぽん（三根幸子郎君（法2）他）

準優勝 Kana-s（石野敬祐君（理工3）他）

第3位 Fighting Girls（吉田紀子君（法4）他）

コメント：

大会は経験者グループ（15チーム）・初心者グループ（18チーム）、計33チームによって行なわれ、それぞれ予選リーグ戦及び決勝トーナメント戦を実施した。また、看護医療学部の特選生を除いた全学部からの参加があり、特別参加として今回はじめて、このような大会に毎年スポーツドリンクを無料提供して頂いている大塚製薬㈱のスタッフチームも出場した。

競技内容は、例年になく接戦の多い大会となり、経験者グループのレベルは非常に高いものであった。大会の後半には山崎元常任理事も観戦され、放送研究会の國廣淨晃君（法4）の力強い実況放送の下、盛り上がった大会となった。

参加申込は先着順で行なったので、前回同様、出場を希望するすべてのチームの参加を認めることはできなかった。コート数の増大や日程の延長等による大会の規模拡大が多くの塾生に求められていることを感じた。

5) 塾長杯・体育会理事杯争奪瓊谷クロスカントリー大会

主 催：慶応義塾体育会

協 力：体育研究所

開催日時：平成13年12月1日（土） 13：00 開会式、14：00スタート

場 所：日吉陸上競技場及びその周辺

参加者数：331名（体育会部員314名、一般17名）

2. 公開講座

「中高年のための水泳教室」

担 当 者：高嶺隆二（体育研究所）、小森康加（体育研究所非常勤講師）、ドートレー・昌子（塾員）

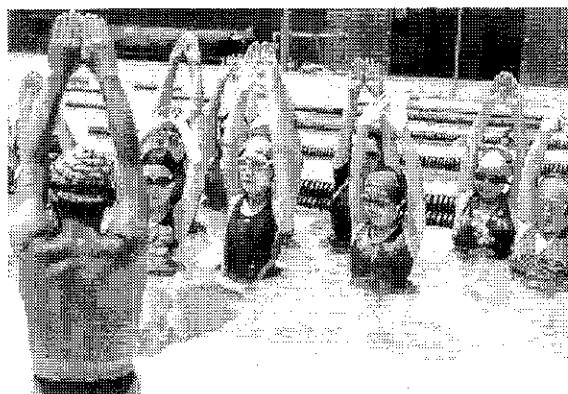
日 程：平成13年7月14日（土）～7月29日（日）の土日祝日、全7回

時 間：10：00～11：30

会 場：日吉プール

参加者数：29名

受 講 料：5000円



3. 横浜市民講座

講演要旨「ヨーロッパにおけるスポーツ」

近藤 明彦

100年目を越えたオリンピックや各種競技種目の世界選手権、ワールドカップなど、20世紀はスポーツの世紀といっていいほどに様々なスポーツが世界的規模で行われるようになった。日本においても早い時期から盛んに行われてきた野球をはじめ、1990年代にJリーグの成立により一躍脚光をあびるようになったサッカーまで数多くのスポーツ種目が盛んに行われている。野球はアメリカ発祥のスポーツであり、サッカーはイギリス発祥のスポーツであるが、もともとスポーツが今日の隆盛を極めるきっかけはイギリスに端を発する産業革命によるものである。

まず産業革命によって生まれたジェントルマン階級やパブリックスクール、カレッジの学生など時間的に余裕のある者がスポーツを盛んに行うようになった。そして、イギリスは18世紀中頃以降の産業革命で飛躍的に増大した工業製品の販路を求めて植民地政策を行うが、輸出されたものは工業製品にかぎらなかった。一つの輸出品は言語すなわち「英語」であり、もう一つの輸出品は「スポーツ」、なかでもクリケットであったと言われている。アメリカのベースボールの原形になったと言われているこのスポーツは、チーム・メンバーが for the team の精神を持つことが肝要とされており、近代的な組織社会での一員として個人がどのように振る舞わねばならないかということを植民地住民に教えるには最適なスポーツであったと言われている。

残念ながらクリケットは世界的なスポーツとはならず、これに取って代わったのは中世より支配者階層から度々禁止令が出されていたサッカーであるが、この簡単なルールしかないスポーツは、それぞれの国で独自の色彩が塗り込められ、すなわち個人の技能やチーム戦術などの様々なアイディアを取り入れることにより各国独自の発展をしていたものと見なされている。

また、このような背景のもとにプロシアとの普仏戦争に敗れたフランスからイギリスに留学していたクーベルタンは、イギリスの学校教育の中に取り入れられていたスポーツに着目し、特に青少年に対する教育的効果を視野に入れながらオリンピックムーブメントを広げていくのである。この時期までヨーロッパ大陸においては、学校教育の中に取り入れられていたのは、その起源を古代ギリシャにまでさかのぼる体操でありスポーツは実施されていなかったのである。

さて、ヨーロッパ、特にイギリスをその発祥の地とするスポーツが世界に広がりを見せるが、アメリカはこれらイギリス発祥のスポーツをそのまま受け入れる事はせず、独自のスポーツを展開していくのであった。日本で隆盛を極めている野球をはじめ YMCA で考案されたバスケットボール、バレーボール、あるいはアメリカン・フットボールなどである。なぜアメリカではヨーロッパ発祥のスポーツが盛んにならなかったかは定かではないが、この2つの地域で発祥したスポーツの持つ特色は異なったものとなっている。ヨーロッパ系のスポーツが主将を中心にしたキャプテンドミナントであるのに対して、アメリカのスポーツはコーチドミナントであること、また、ヨーロッパ系スポーツはレフリーの人格や権限を尊重するのに対して、アメリカ系スポーツはルール中心である事などであり、その他にも様々な違いがある。

近年、テレビ等のメディアによってスポーツが放映されることにより、ゲーム時間の短縮のため、あるいは観客が見て分かりやすく、また楽しめるスポーツへの変換が望まれており、ヨーロッパ系のスポーツもアメリカナイズされてきたと言われている。思えばイギリス発祥のクリケットは1イニング1日で長いときは1週間もかけて試合を行っていたのは、産業革命後に生まれた有産階級であり時間を十分に持っていたジェントルマン層が中心となっていてきたのがスポーツの起源であったことを考えると社会の変遷とともにスポーツが変化していく実態が伺える。

4. 教職員対象フィットネスプログラム

1) エアロビクス教室（春）

日 程：平成13年5月18日（金）～7月6日（金）の毎週金曜日、全8回

時 間：17：00～18：00

会 場：体育研究所3Fエクササイズスタジオ

登録者数：30名

1回平均参加者数：20名

講 師：鈴木智子（体育研究所非常勤講師）

2) エアロビクス教室（秋）

日 程：平成13年10月12日（金）～12月7日（金）の毎週金曜日（11/23金は除く）、
全8回

時 間：17：00～18：00

会 場：体育研究所3Fエクササイズスタジオ

登録者数：20名

1回平均参加者数：10名

講 師：鈴木智子（体育研究所非常勤講師）

3) 日吉プール公開

公開の目的：教職員の健康と体力の増進に寄与すること

期 間：(a) 平成13年7月2日（月）～平成13年7月16日（月）の月・木曜
（7/2・5・9・12・16の5日間）

(b) 平成13年8月1日（水）～平成13年8月29日（水）の月・水・金

（8/1・3・6・8・10・13・15・17・20・22・24・27・29の13日間）

時 間：16：30～18：00

場 所：日吉プール（競泳用）の体育研究所側2コース（第8・9コース）

利用対象：期間(a)は本塾教職員及び体育研究所トレーニングルーム利用塾生

期間(b)は本塾教職員に限る

監 視 員：体育会水泳部員（2名）

利用者数：期間(a)：延べ24名（教職員9名、塾生15名）

期間(b)：延べ49名

5. 他機関との連携

1) OPEN CAMPUS! 2001 への参加

主 催：慶應義塾大学

開催日時：平成13年8月17日（金） 9：30～16：00

場 所：日吉キャンパス及び矢上キャンパス

主な内容：日吉キャンパス・ツアーコース内の日吉記念館において、慶應義塾大学における体育・スポーツに関する情報を提供した。

参加者数：約 800 名（オープンキャンパス（日吉）全体には約 4900 名来塾）

2) 第16回「スキーの集い」への講師派遣

主 催：慶應義塾大学学生総合センター「大学生活懇談会」

日 程：平成14年2月6日（水）～9日（土）

場 所：新潟県南魚沼郡塩沢町 上越国際スキー場

宿 泊：高七城

引率教職員：松田雅之・石手靖・大嶽真人（体育研究所）、佐々木三男（環境情報学部）、辰巳忠志（学生総合センター）、村松夏彦（SFC 事務室）

参加者数：36名

天 候：晴（2／6～8）、雨・雪（2／9）



3) エアロビクスフェスティバルの開催

主 催：慶應義塾大学体育研究所

協 力：アスリエスポーツクラブ／大塚製薬(株)

対 象：塾生及び教職員／地域在住の方々（港北区日吉）／アスリエスポーツクラブ
会員

趣 旨：① エアロビクスの楽しさ、気持ち良さを普及すること

② エアロビクスを通じて健康に対する関心を高め、運動の必要性を伝える
こと

③ 参加者同士の親睦交流の場を提供すること

開催日時：平成13年10月21日（日） 10：00～13：00

会 場：日吉記念館

指 導：アスリエスポーツクラブ所属インストラクター（9名）

参 加 費：無料

参加人数：127名（塾生及び教職員18名、その他 109名）

コメント：

本イベントは、体育研究所スポーツ振興委員会が企画したイベントとしては、はじめて民間企業との協力による開催となった。このことはキャンパスでのスポーツの普及振興策として新たな展開を踏み出せたという点で評価できると考えている。

又、イベントの内容に関しても、音楽に合わせて運動するというエアロビクスの特性が生かされ、楽しく運動を継続することができたという点で評価できるだろう。ダンスのように情緒的に踊るというよりは、かなり激しいステップの強度な筋運動となった。

しかし、本イベントが初の試みであったことが影響し、イベントに対する塾生の関心を高めることができなかったことは、企画運営側の反省材料として指摘される。イベントの内容及び情報提供の方法等を再度工夫する必要があると考えられる。もちろん地域への展開も同様である。今後は今回の経験を生かし、より多くの参加者が集うイベントとなるように検討を重ね実施していきたい。



6. 所内施設の開放

1) トレーニングルーム（1F）の開放

期 間：平成13年 4/16～20、5/7～7/18、10/1～12/20、平成14年 1/7～23

曜 日：月～金

時 間：15：00～18：00

利用者数：

	塾 生	教職員	合 計
春 学 期	786	215	1001
秋 学 期	535	108	643
年 間	1321	323	1644

コンディショニングトレーナー担当者

時 間	月	火	水	木	金
15：00	石 手	國 廣 学生スタッフ	望 月	大 嶽	小 牧
16：30				野 口	村 山
18：00					

コメント：

この授業実施期間のトレーニングルームの開放については、興味ある塾生及び教職員にとって、非常に有益なものと判断している。利用者数も年々増加傾向にあり、塾生及び教職員の健康増進及び体力向上を目指す一策として機能を果たしていると考えられる。しかしながら、トレーニングルームの面積及び設備は決して十分なものではなく、その点については利用者からその充実が訴えられている。

2) エクササイズスタジオ（3F）の開放

塾生に対する課外活動の場の提供として、エクササイズスタジオの授業使用時間以外をサークル等に開放している。今年度は下記の団体が有効に利用した。

使用団体：ボクシング愛好会（水・木曜日 16：30～18：00）

ダンスサークル SIG（土曜日 12：00～14：00）

チア&ソングリーディング UNICORNS（不定期）

応援指導部チアリーディング部（不定期）

第4部 総務分野

体育・知育・徳育

体育研究所主事 中 嶋 孝 雄

日吉銀杏並木、日吉を象徴している。春の新緑から夏の青葉、秋の黄葉そして冬の葉を落とし聳え立つ木々。新緑では初々しい少年期に思いを致し、青葉の時には青年期のたくましさを感じる。秋の黄ばんだ葉に陽射しが映えるときいぶし銀の成熟期を照らす。そして、冬の裸になった木々からは、そっと耳を澄ますと言葉が聞こえてくるようだ。

喧騒な街並みから一步步を進めると、ここは別天地、学問とスポーツ、芸術の集積回路となる。並木を歩いたことのある人にとって、心のふるさととなって息づいて行くのである。今では、銀杏並木は横浜まちなみ景観賞ともなっていてさらに多くの人々に多くの思いを語らせることだろう。

並木に吸い込まれ右に折れると、陸上競技場と大プールに挟まれたわが国、体育学の発信地当研究所。

平成13年4月1日から平成14年3月31日の1年間を多彩な企画催しで彩った活動を主事の日を通して振り返った。

○平成13年4月1日 ・大嶽真人君が助手（嘱託）として就任。

新事務室の開設 従来、事務室には業務委託の二人の婦人が受付け業務を中心に永年勤務されていたが、雇用企業の倒産ということで平成13年3月末日を以って業務委託契約が解除されることとなった。

研究所としてはかねてから事務室の充実を検討してきていたので、関係者と図りながら望ましい在り方についてまとめることにした。事務室自体も改修して業務を遂行し易く計った。入り口のドアについても取り替えた。

人員の配置は嘱託職員1名、アルバイト2名の配置にして、教員の補助的な仕事の手伝いから郵便物、納品への迅速な対応、コミュニケーションのより円滑化を目的とした。

勤務時間は授業のある期間とない期間の二通りに分けて授業に支障のないよう配慮した。授業のある期間は勤務終了時間が16時15分になるが平日の月曜から金曜日にかけては、学生アルバイトによって18時30分までをカバーすることとした。

○4月3日 ・入学式

新入生 6,411名

ご父兄はJ11、J14、J19、日吉会堂等で日吉記念館内入学式の実況中継を観る。

当研究所非常勤講師懇談会開催 グリーنزカフェ

授業実施にかかわる綿密な打ち合わせを行う。

○4月5日 ・保健体育科目ガイダンス

各教室で授業内容について説明、質問に答える。

○4月9日～14日 ・記念館ガイダンス ・日吉陸上競技場イベント（科目ガイダンス週間）

記念館で種目のデモおよび解説、陸上競技場ではデモと合同競技が展開される。

教室では、科目ガイダンスが1週間行われ、90分の授業を前後35分ずつ2回に分けて授業

を行い、中の20分は教室の移動時間に適用、塾生は授業を訊いて自分の判断で履修する科目をディシジョンメイキングすることになる。2回に分けているのは聴講する機会を増やすためである。

○4月16日 ・履修申告（2年）

○4月17日 ・履修申告（1年）

履修申告用紙で申告する方法とWEBによるインターネットを利用する申告の二通りあって、因みにWEB利用率は44.6%（全地区）であった。

○4月24日 ・履修調整結果発表

総合教育科目の履修調整結果がでる。

抽選61科目 打切り41科目 オープン242科目 研究室28科目 追加は授業12科目 日吉設置科目全科目数4,164科目。

かくして、塾生は1年間の履修計画を自分自身で作成、本格的な授業に臨むことになる。結果は直ぐには出ないが努力の深浅によって、自己形成に大きく関わってくるのである。

○4月28日 ・実技Ⅱ費用納入締め切り

学事センター総合受付特設窓口で受け付けた。

KEIO BaLL-Games Festa 2001（スポーツフェア）

快晴の中、日吉陸上競技場で午前はミニサッカー、フィールドバレーボールの体験イベント、午後はフラッグフットボール、ラクロスなどのゲームが繰り広げられた。

○5月26日 ・2001 塾長杯フットサル大会

参加35チーム、選手351名、観客50名。花を添えたチア&ソングリーディング UNICORNS のダンス、放送研究会メンバーによる楽しいトーク。

優勝は修羅軍（代表：新田智昭君 理工3年）

観戦の一員として思うことがある。躍動する身体、俊足な動き、疲れを知らない体力、エネルギーの発露をみる。

義塾はスポーツが盛んである。塾生は、SCHOLAR-ATHLETE であり文武両道の士が多いことを実感するときでもある。

○6月12日 ・体育実技Ⅱ（シーズン・スポーツ）

担当者を集めた実技指導員会議を山食で開催

授業の展開、実技用具の手配、採点票の受渡し方法、事故への対応等についてこまかく申し合わせる。手抜きのできないステップである。

○7月2日 ・日吉プール公開

8月29日までの所定の日で時間は、16:30~18:00。

全地区教職員を対象として健康と体力の増進に役立てるべく体育会水泳部の協力を得て行う。

○7月14日 ・大学公開講座 中高年のための水泳教室 高嶺教授指導 参加34名 29日まで。

○7月23日 ・体育委員会開催

所長の選任が諮られた。

○8月17日 ・オープンキャンパス開催

参加高校生は、5,500名。

日吉キャンパスは若人で溢れた。学部説明会、模擬授業、個別説明等のほかに今年の特色

は当研究所教員の協力による日吉記念館での体育会塾生による体育実技のデモンストレーションであった。大学実技を目の前にして、高校生には新鮮で大学をより身近に肌で実感できたと大好評であった。思わぬところに教育効果が現れた。

○9月12日 ・バレーボールコート（第三校舎下）サーフェイスの塗り替えを行う。

○9月14日 ・浅野基金選考会

松田助教授の研究「スプリント走における即時的フィードバックの効果について」が選ばれた。

○9月26日 ・トレーニングルームの開放

塾生、教職員に開いているもので身体を鍛えたい希望者にトレーニング方法をアドバイス等適切な指導を行う。月～金の15:00～18:00。

○10月1日 ・高嶺所長（重任）発令 任期 平成15年9月30日まで。

高嶺所長の重任に伴って新たに役職者が選出された。

学習指導主任 近藤 明彦君

副主任 松田 雅之君

副主任 山内 賢君

総務委員会委員長 安藤 勝英君

教育委員会委員長 近藤 明彦君

研究委員会委員長 佐々木玲子君

スポーツ振興委員会委員長 綿田 博人君

○10月12日 ・エアロビクス教室始まる。

教職員を対象としている。

○10月20日 ・塾長杯バレーボール大会

外は快晴の秋日和、記念館の中は三面のコートで展開される試合は汗迸る熱戦。

優勝： 経験者グループ 慶應牧場 初心者グループ しゅぼぼぼん

○10月21日 ・エアロビクスフェスティバル開催

当研究所スポーツ振興委員会企画による初の民間企業（アリエススポーツクラブ）との協力による開催。エアロビクスの特性を体育的側面より考察したのが特徴であった。

○10月27日 ・近藤教授横浜市民講座で「ヨーロッパにおけるスポーツ」講演

○11月2日 ・大学公開講座「中高年のためのトレーニング教室」開講

生涯にわたって健康に生活して行くための健康・体力作りの方法を学ぶ。

講師は今栄貞吉教授

○11月28日 ・体育委員会 佐々木玲子教授昇任、須田芳正助手任用を諮る。

平田大輔君、依田珠江君の助手（嘱託）採用決まる。

○12月1日 ・第30回塾長杯・体育会理事杯争奪蜷谷クロスカントリー大会

当研究所スポーツ振興委員会では、全面的にバックアップした。

平成14年

○1月7日 ・授業開始

○1月11日 ・石手専任講師国際学会発表のため米国出張

演題「University-Level SCUBA Diving Instruction in Japan」

- 1月17日 ・エクササイズルームおよびトレーニングルーム等の冷暖房設備設置工事始まる。
- 1月24日 ・秋学期末定期試験始まる。2月5日まで。
この時期、吉野秀雄が塾生時代を詠んだ歌「図書館の前に沈丁咲くころは恋も試験も苦しかりにき」を想う。
- 1月25日 ・大学評議会
今栄貞吉教授、名誉教授に推薦承認される。
佐々木玲子助教授、教授昇任および須田芳正助手の任用承認さる。
日吉の来往舎研究センター、カリキュラムの再構成を審議する機関として
日吉教育・研究体制検討委員会
日吉キャンパス運営委員会
日吉キャンパス運営委員会幹事会の立ちあげ承認される。
- 2月13日 ・入学試験始まる。
緊張の連続するシーズンだ。
- 2月20日 ・日吉記念館内バスケットボールゴール取付け（リング）工事完了
- 2月28日 ・来往舎（新研究室棟）竣工式
当研究所から4名の教員（安藤勝英教授、近藤明彦教授、植田史生助教授、石手靖専任講師）が来往舎に入室された。学部教員との学際的な関係の深まりが期待される。
外壁（西・北側）改修工事始まる。
- 3月15日 ・学術フロンティア——文化としてのウォーキング——
近藤教授シンポジストを務める。
- 3月23日 ・卒業式 蛍雪の功なった塾生諸君、名実共に人生の commencement。心の中から大望を遂げよ、と叫んだ。
- 3月26日 ・照井秋雄君 永年に亙り体育授業スムーズな運営に向けて誠心誠意施設管理等に情熱を傾注された。本日、退職あいさつ回りをされる。ありがとうございました。
- 3月30日 ・今栄貞吉教授退職送別会
研究所 OB 諸氏が出席されたが、さすがスポーツを本務とされていた方々壮健であられる。

1年を省みると日誌の行間から汗の匂いが漂ってくるようだ。流された汗の後には尊い結晶が結果するものだ。塾生に何かしらの結晶が実ることを祈りたい。

付録として、2001年は、スポーツ界にとって記憶に残ることがある。

イチロー米大リーグ・マリナーズ外野手が、234 安打を打って、大リーグ新人最多安打記録を90年ぶりに更新したこと。

シドニー五輪金メダリスト高橋尚子が、第28回ベルリン・マラソンで女子では世界で初めて2時間20分を突破する2時間19分46秒の世界最高で初優勝したこと。（1週間後ヌデレバが更新）

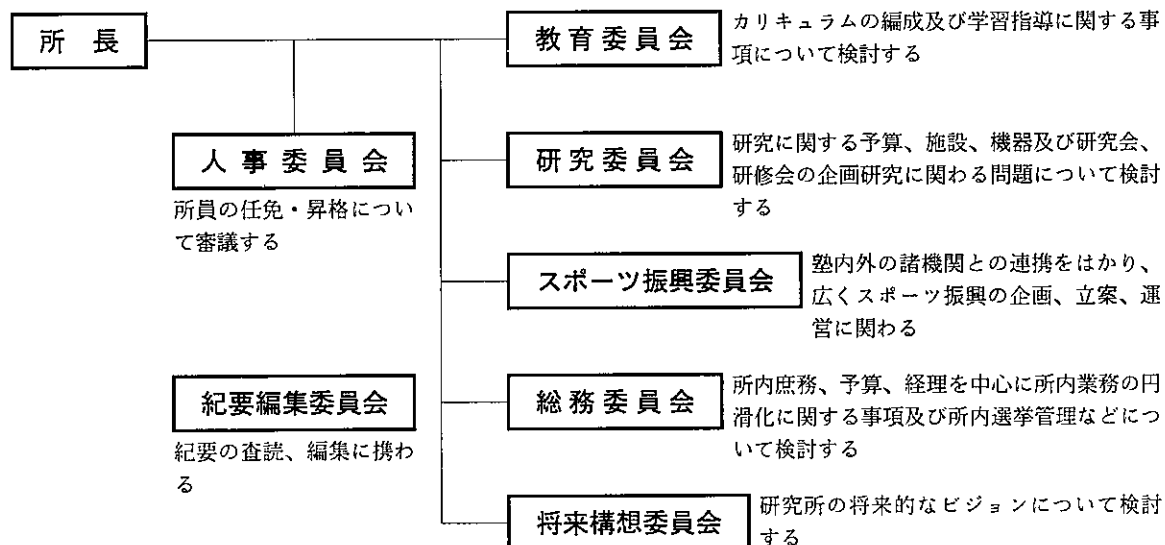
TVの前に釘付けになって観戦したが、多くのことを学ぶ機会ともなった。

体育研究所及び所内組織図

体育研究所所員・所属委員会一覧

氏 名		所 属 委 員 会
所 長	高 嶺 隆 二	人事委員会、紀要編集委員会
教 授	橋 本 治 雄	人事委員会、紀要編集委員会
	今 栄 貞 吉	人事委員会、研究委員会、紀要編集委員会
	近 藤 明 彦	人事委員会、教育委員会、紀要編集委員会
	安 藤 勝 英	人事委員会、総務委員会、紀要編集委員会
助 教 授	篠 原 しげ子	研究委員会
	植 田 史 生	研究委員会
	綿 田 博 人	スポーツ振興委員会
	松 田 雅 之	人事委員会、教育委員会
	佐々木 玲 子	研究委員会
専任講師	石 手 靖	スポーツ振興委員会、将来構想委員会
	山 内 賢	教育委員会
	吉 田 泰 将	総務委員会、将来構想委員会
	加 藤 大 仁	教育委員会、将来構想委員会
	村 山 光 義	研究委員会、将来構想委員会
	野 口 和 行	教育委員会
助 手	望 月 康 司	スポーツ振興委員会
	小 牧 久見子	総務委員会
	大 獄 真 人	スポーツ振興委員会

体育研究所組織図



平成13年度活動報告書

平成 14 年 7 月 1 日発行

[非売品]

編 集：活動報告書編集委員会

高嶺 隆二 安藤 勝英 石手 靖
吉田 泰将 村山 光義 野口 和行
小牧久見子

発 行：慶應義塾大学体育研究所

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4 - 1 - 1

制 作：(有)梅沢印刷所

〒 108-8345 東京都港区三田 2 - 15 - 45